



193



203



198



195



213



202



201



212



214



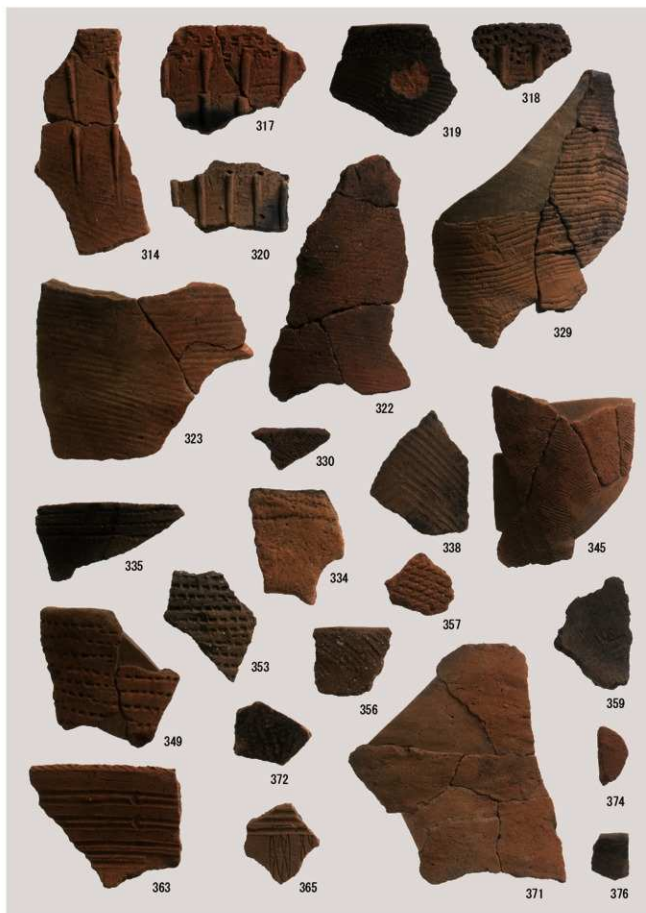
196



209





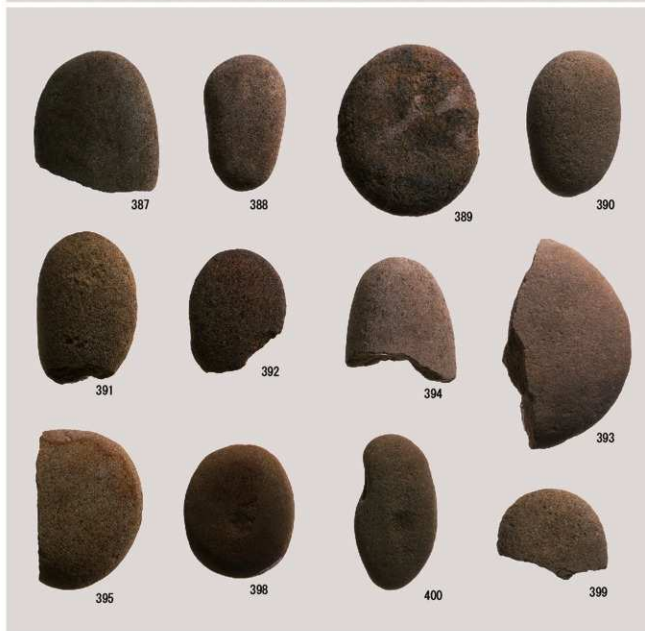




外面

内面

断面







441



439



438



491



485



484



471



472



474



473



475



476



477



478



482



488



486



478



479



483



487



489



493



494



495







448



449



450



451



452



453



454



455



456



457



458



459



462



463



464



465



468





589



587



588



590



592



593



594



604



600



595



595



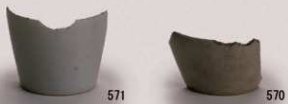
601



598



602



606

序 文

この報告書は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴って、平成30年度に実施した志布志市志布志町に所在する宇都上遺跡の発掘調査の記録です。

宇都上遺跡は、志布志湾から北に約5kmの内陸部に位置し、安楽川の浸食を受けた台地と河川部の中間に所在します。

縄文時代においては早期前半を中心に、前平式土器などの土器や石器とともに集石遺構33基・土坑7基・落とし穴1基が発見されており、同時期の多数の集石遺構や連穴土坑が検出された、近接する高吉B遺跡との関連が想定されます。また、青磁・白磁等の陶磁器類や五輪塔などの石塔類が入った中世の土坑が検出され、古くから知られる港町としての「志布志」の歴史を考える上で、重要な資料を提供してくれました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

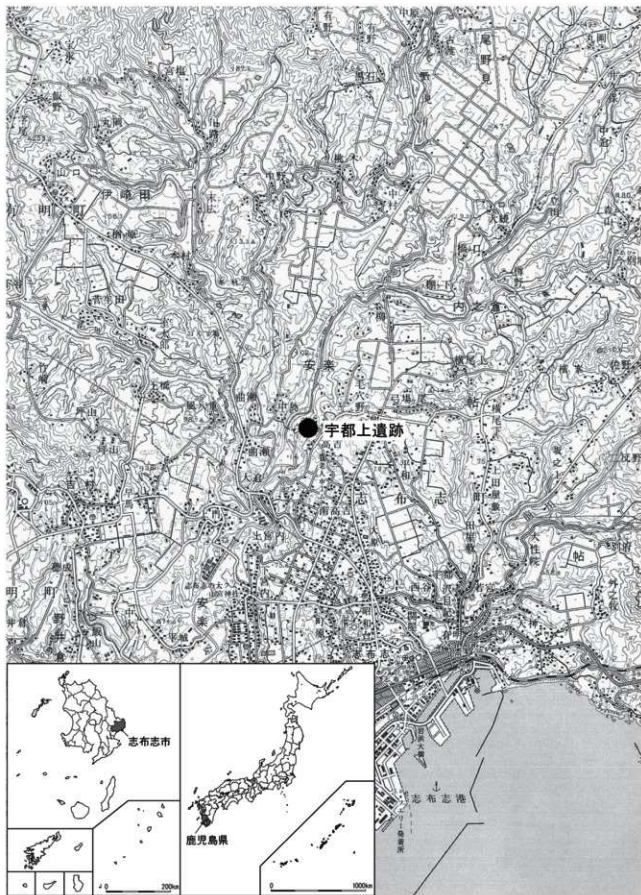
最後に、調査にあたり御協力をいただいた、県土木部道路建設課、志布志市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

令和2年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 前 迫 亮 一

報 告 書 抄 録

ふりがな	うとうえいせき							
書名	宇都上遺跡							
副書名	主要地方道志布志福山線(有明志布志道路)改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	204							
編集者名	藤島伸一郎・株式会社バスコ(池畑耕一・関口昌和・関口真由美)							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 Tel. 0995-48-5811							
発行年月	2020年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
宇都上遺跡	鹿児島県 志布志市 志布志町 安楽 宇都上・ 高吉	46221	292	31° 50'	131° 08' 46"	2018.06.04～ 2018.11.28	4,998 m ²	主要地方道志布志福山線(有明志布志道路)改築事業に伴う記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宇都上遺跡	散布地	旧石器時代			加工痕のある剥片			
		縄文時代 早期	集石遺構 33基 土坑 7基 落とし穴 1基		前平式土器、志風頭式土器、加栗山式土器、小牧3A式土器、札ノ元Ⅶ類土器、石坂式土器、別府原式土器、下刺半式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、手向山式土器、塞ノ神A a式土器、塞ノ神A b式土器、円盤形土製品、磨製石鏃、打製石鏃、削器、磨製石斧、磨石、石核、剥片			
		弥生時代 前期・中期			高橋式土器、入来式土器			
		古墳時代			辻堂原式土器			
		中世	大型土坑 2基 土坑 2基 溝状遺構 4条 硬化面 1条		土師器、土師質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、瀬戸焼、青磁、白磁、中国産陶器、タイ産陶器、染付、砥石、軽石製品、石塔、石臼、鉄製品			
		近世	土坑 4基 石塔 1基・石碑 1基 溝状遺構 2条		備前焼、肥前系陶磁器、煙管、石碓			
		時代不明	杭列 2列					
要約	<p>宇都上遺跡は縄文時代早期と中世を主体とする遺跡である。</p> <p>縄文時代早期は多種の土器とともに33基の集石などが検出されている。主となるのは前平式土器・加栗山式土器・小牧3A式土器など前葉の土器で、谷を挟んだ両側平地に各型式の土器が集中して出土している。集石の集中域と重なり活動域の変動がわかる貴重な資料である。</p> <p>中世は陶磁器や石塔が入った2基の大型土坑が検出された。遺物は一括性がうかがわれ、石塔の廃棄理由など、その性格が注目される。</p>							



第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

例 言

- 1 本書は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に伴う宇都上遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県志布志市志布志町安楽宇都上・高吉に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）が担当した。
- 4 発掘調査は、平成30年度に埋文センターが実施した。
- 5 整理作業・報告書作成作業は、令和元年度に埋文センターが実施した。
- 6 平成30年度は、発掘調査業務を新和技術コンサルタント株式会社へ委託し、埋文センターの指揮・監督のもとに調査を行った。また、空中写真撮影は株式会社ふじたに再委託した。
- 7 令和元年度は、整理作業及び報告書作成作業・自然科学分析・印刷製本を株式会社パスコへ委託し、埋文センターの指揮・監督のもとに実施した。
- 8 遺構図・遺物分布図の作成及びトレース、出土遺物の実測・拓本・トレースは株式会社パスコが行った。なお、報告書の作成にはAdobe社製「InDesignCC」、「IllustratorCC」、「PhotoshopCC」を使用した。
- 9 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて、西園勝彦が行った。
- 10 金属製品の保存処理は、埋文センターが実施した。
- 11 本報告に係る自然科学分析は、放射性炭素年代測定をバリノサーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボへ委託した。
- 12 使用した土色は『新版 標準土色帳』（2013農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
- 13 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 14 本書で使用した方位は、すべて座標北（G、N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 15 遺構種別ごとに略記号を付けて調査を行った。遺構の略記号を次に示す。
SS：集石 SK：土坑 SD：溝状遺構
SA：杭列
- 16 執筆担当は以下のとおりである。
第1章、第2章第3節、第3章、第4章第2・5・6・7節 遺構、第6章 藤島伸一郎
第2章第1・2節、第4章第2～4節 土器
池畑耕一・関口真由美
第4章第1・2節 石器 関口昌和
第5章は委託業者の納品原稿をもとに藤島が編集した。
- 17 遺構の縮尺は次を基本とした。
集石 1/20、土坑 1/20、落とし穴 1/20
大型土坑 1/60、溝状遺構・硬化面 1/100
杭列 1/40、石塔・石碑 1/40
- 18 掲載遺物の縮尺は次を基本とした。
土器・土製品 1/3、石器・石製品 1/1～1/3
石塔・石臼 1/8、鉄製品 1/3、キセル 1/2
各図中にスケールを示してある。
- 19 掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合、表面が左、裏面が右に配置してある。
- 20 掲載遺物番号はすべて通し番号であり、本文、挿図、表及び図版の番号は一致する。
- 21 観察表中の胎土は次のとおりである。
白石・茶石・黄白石・灰石：その色を呈する小礫
黒石：黒色を呈する小礫もしくは黒色の鉱物
長石：主に白色の角張ったもの
雲母：主に金色を呈する薄い板状のもの
石英：透明度が高くガラス質の光沢をもつ
火山ガラスも一部含まれる
- 22 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は「U T U」である。

本文目次

巻頭図版 (カラー)

序文

報告書抄録

例言

目次

第1章	発掘調査の経過	1
第1節	調査に至るまでの経緯	1
第2節	試掘調査	1
第3節	本調査	1
第4節	調査の経過	2
第5節	整理作業・報告書作成作業	3
第2章	遺跡の位置と環境	4
第1節	地理・地質的環境	4
第2節	歴史的環境	4
第3節	都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡	10
第3章	調査の方法と層序	13
第1節	調査の方法	13
第2節	層序	13
第4章	調査の成果	19
第1節	旧石器時代の調査	19
第2節	縄文時代早期の調査	20
第3節	弥生時代の調査	82
第4節	古墳時代の調査	82
第5節	中世の調査	83
第6節	近世の調査	101
第7節	時期不明の遺構	112
第5章	自然科学分析	113
第1節	出土試料の自然科学分析 (年代測定)	113
第2節	放射性炭素年代測定	114
第3節	宇都上遺跡出土遺物の化学分析	116
第6章	総括	117
第1節	縄文時代早期	117
第2節	中世	118
第3節	近世	120

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	38
第 2 図 試掘調査トレンチ配置図及び調査区	39
第 3 図 周辺の遺跡	40
第 4 図 都城志布志道路建設に伴う 県内の遺跡	41
第 5 図 グリッド配置及び調査範囲図	42
第 6 図 基本土層柱状図	43
第 7 図 土層断面図 (1)	44
第 8 図 土層断面図 (2)	45
第 9 図 土層断面図 (3)	46
第 10 図 旧石器時代の試掘坑配置と 石器分布図	47
第 11 図 旧石器時代の石器	48
第 12 図 縄文時代早期の遺構配置図	49
第 13 図 集石 1 号と出土遺物	50
第 14 図 集石 2 号と出土遺物	51
第 15 図 集石 3 号～5 号と出土遺物	52
第 16 図 集石 6 号～8 号と出土遺物	53
第 17 図 集石 9 号・10 号と出土遺物	54
第 18 図 集石 11 号～13 号と出土遺物	55
第 19 図 集石 14 号と出土遺物	56
第 20 図 集石 15 号・16 号と出土遺物	57
第 21 図 集石 17 号と出土遺物	58
第 22 図 集石 18 号と出土遺物	59
第 23 図 集石 19 号～21 号	60
第 24 図 集石 22 号	61
第 25 図 集石 23 号と出土遺物	62
第 26 図 集石 24 号と出土遺物	63
第 27 図 集石 25 号と出土遺物	64
第 28 図 集石 26 号・27 号	65
第 29 図 集石 28 号	66
第 30 図 集石 29 号・30 号	67
第 31 図 集石 31 号と出土遺物	68
第 32 図 集石 32 号と出土遺物	69
第 33 図 集石 33 号と出土遺物	70
第 34 図 土坑 1 号～4 号	71
第 35 図 土坑 5 号～7 号	72
第 36 図 落とし穴と出土遺物	73
第 37 図 縄文時代早期の土器分布図	74
第 38 図 縄文時代早期の土器 (1)	75
第 39 図 縄文時代早期の土器 (2)	76
第 40 図 縄文時代早期の土器 (3)	77
第 41 図 縄文時代早期の土器 (4)	78
第 42 図 縄文時代早期の土器 (5)	79
第 43 図 縄文時代早期の土器 (6)	80
第 44 図 縄文時代早期の土器 (7)	81
第 45 図 縄文時代早期の土器 (8)	82
第 46 図 縄文時代早期の土器 (9)	83
第 47 図 縄文時代早期の土器 (10)	84
第 48 図 縄文時代早期の土器 (11)	85
第 49 図 縄文時代早期の土器 (12)	86
第 50 図 縄文時代早期の土器 (13)	87
第 51 図 縄文時代早期の土器 (14)	88
第 52 図 縄文時代早期の土器 (15)	89
第 53 図 縄文時代早期の土器 (16)	90
第 54 図 縄文時代早期の土器 (17)	91
第 55 図 縄文時代早期の土器 (18)	92
第 56 図 縄文時代早期の土器 (19)	93
第 57 図 縄文時代早期の土器 (20)	94
第 58 図 縄文時代早期の土器 (21)	95
第 59 図 縄文時代早期の土器 (22)	96
第 60 図 縄文時代早期の石器分布図	97

第61図 縄文時代早期の石器(1)	69	第81図 硬化面と出土遺物	97
第62図 縄文時代早期の石器(2)	70	第82図 中世の出土遺物	97
第63図 縄文時代早期の石器(3)	71	第83図 近世と時期不明の遺構配置図	101
第64図 縄文時代早期の石器(4)	72	第84図 溝状遺構5号・6号と出土遺物	102
第65図 弥生時代の土器	82	第85図 土坑10号～13号と出土遺物	103
第66図 古墳時代の土器	82	第86図 石塔と土坑11号	104
第67図 中世の遺構配置図	83	第87図 石塔周辺の出土遺物(1)	105
第68図 大型土坑1号	84	第88図 石塔周辺の出土遺物(2)	106
第69図 大型土坑2号	85	第89図 石塔周辺の出土遺物(3)	107
第70図 大型土坑1号の出土遺物(1)	86	第90図 石塔周辺の出土遺物(4)	108
第71図 大型土坑1号の出土遺物(2)	87	第91図 石塔周辺の出土遺物(5)	109
第72図 大型土坑1号の出土遺物(3)	88	第92図 杭列1号・2号	112
第73図 大型土坑1号の出土遺物(4)	89	第93図 暦年較正結果	113
第74図 大型土坑2号の出土遺物	90	第94図 暦年較正結果	115
第75図 大型土坑1号・2号の出土遺物(1)	91	第95図 成分分析結果	116
第76図 大型土坑1号・2号の出土遺物(2)	92	第96図 縄文時代早期集石・遺物分布図	117
第77図 大型土坑1号・2号の出土遺物(3)	93	第97図 宮崎市山内石塔群の例	119
第78図 土坑8号・9号	94	第98図 鶴喰遺跡22号土坑	120
第79図 溝状遺構1号・2号	95		
第80図 溝状遺構3号・4号と 溝状遺構の出土遺物	96		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	8	第10表 古墳時代土器観察表	81
第2表 都城志布志道路に係る 鹿児島県内の遺跡	10	第11表 中世遺構出土土器器・須恵器・ 陶器等観察表	98
第3表 旧石器時代石器観察表	19	第12表 中世遺構出土青磁・白磁等観察表	99
第4表 遺構番号振替表	44	第13表 中世遺構出土石製品観察表	100
第5表 縄文時代早期集石出土土器観察表	73	第14表 中世遺構出土金属製品観察表	100
第6表 縄文時代早期落とし穴出土石器観察表	73	第15表 中世土器器・須恵器・陶器観察表	100
第7表 縄文時代早期土器観察表	74	第16表 中世青磁・白磁観察表	100
第8表 縄文時代早期石器観察表	81	第17表 近世石塔周辺出土陶磁器観察表	110
第9表 弥生時代土器観察表	81	第18表 近世石塔周辺出土石製品観察表	111

第19表 近世石塔周辺出土金属製品観察表	111	第23表 FPM定量結果	116
第20表 放射性炭素年代測定結果	113	第24表 炭化物年代測定結果と 遺構内土器型式	118
第21表 測定試料および処理	115	第25表 周辺遺跡の遺構と土器型式	118
第22表 放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果	116		

図版目次

巻頭図版1 遺跡遠景	図版15 縄文時代早期の出土土器(4)	
巻頭図版2 縄文時代早期の出土遺物	図版16 縄文時代早期の出土土器(5)	
巻頭図版3 中世の出土遺物	図版17 縄文時代早期の出土土器(6)	
本文中写真1 I-15区10T北壁土層断面	15	図版18 縄文時代早期の出土土器(7)
本文中写真2 旧石器時代の石器	19	図版19 縄文時代早期の出土土器(8)
図版1 遺跡遠景 旧石器時代・縄文時代早期の調査	図版20 縄文時代早期の出土土器(9)	
図版2 縄文時代早期の集石	図版21 縄文時代早期の出土土器(10)	
図版3 縄文時代早期の集石	図版22 縄文時代早期の出土土器(11)	
図版4 縄文時代早期の集石	図版23 縄文時代早期の出土土器	
図版5 縄文時代早期の集石	図版24 中世の出土遺物(1)	
図版6 縄文時代早期の土坑・落とし穴	図版25 中世の出土遺物(2)	
図版7 中世の大型土坑1号	図版26 中世の出土遺物(3)	
図版8 中世の大型土坑2号・土坑・硬化面	図版27 中世の出土遺物(4)	
図版9 中世の溝状遺構	図版28 中世の出土遺物(5)	
図版10 近世の土坑・溝状遺構・杭列	図版29 中世の出土遺物(6)	
図版11 近世の石塔・土坑	図版30 石塔周辺の出土遺物(1)	
図版12 縄文時代早期の出土土器(1)	図版31 石塔周辺の出土遺物(2)	
図版13 縄文時代早期の出土土器(2)	図版32 石塔周辺の出土遺物(3)	
図版14 縄文時代早期の出土土器(3)		

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部道路建設課（以下、道路建設課）は、主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）改築事業に先立って、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

この計画に伴い県文化財課は、平成18年度に志布志市内の埋蔵文化財分布調査を実施し、事業区域内に船迫遺跡・高吉B遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・後迫（下原）遺跡・見掃遺跡等が所在することが判明した。そこで道路建設課・県文化財課・埋文センターの3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために、当該地域において試掘調査を実施することとした。

第2節 試掘調査

1 調査の概要

宇都上遺跡の試掘調査は、県文化財課が埋文センターの協力を得て、平成23年度に3か所（第2図1～3T）、平成28年度に3か所（第2図4～6T）、平成29年度に9か所（第2図7～15T）、計15か所にトレンチを設定し実施した。その結果、弥生時代から縄文時代早期の遺物包含層を確認した。これらの試掘調査等の結果をふまえ、遺跡全体の表面積を6,500㎡、延面積を縄文時代早期6,500㎡、弥生時代2,000㎡、計8,500㎡と設定した。各年度の調査体制は、以下のとおりである。

2 調査体制

(1) 平成23年度

調査日 平成23年7月20～21日

調査者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

第一調査係長 東 和幸

文化財主事 上床 真

鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 川口 雅之

調査協力者 志布志市教育委員会生涯学習課

主 査 出口順一郎

主 査 相美伊久雄

(2) 平成28年度

調査日 平成29年3月17日

調査者 鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 森 幸一郎

調査協力者 志布志市教育委員会生涯学習課

主 査 相美伊久雄

(3) 平成29年度

調査日 平成29年10月19日

調査者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 今村 結記

鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 森 幸一郎

第3節 本調査

1 調査の概要

試掘調査の結果をふまえ、遺跡の取り扱いについて県道路建設課、県文化財課、埋文センターの3者で協議し、遺跡の現地保存が困難であることから、本調査を実施することとなった。本調査は「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、新技術コンサルタント株式会社へ発掘調査の業務委託を行い実施した。

調査期間は平成30年6月4日から平成30年11月28日までの6か月間で、調査体制は以下のとおりである。



第2図 試掘調査トレンチ配置図及び調査区

2 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 堂込 秀人
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	次 長 兼 調 査 課 長 大久保浩二
	総 務 課 長 高田 浩
	第 一 調 査 係 長 中村 和美
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	文 化 財 主 事 永濱 功治 (6～11月)
	文 化 財 主 事 藤島伸一郎 (11月)
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	総 務 係 長 草水美穂子
現地指導	南九州縄文研究会会長 新東 晃一
	鹿児島県考古学会会長 本田 道輝
	鹿児島大学名誉教授 大木 公彦

3 発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり、埋文センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき、新和技術コンサルタント株式会社へ見帰遺跡とともに発掘調査業務委託を行った。なお、埋文センターの文化財主事1名が監督職員として常駐し、調査方法及び業務内容に係わる統括・指揮・調整を行った。委託内容等は以下のとおりである。

委託先	新和技術コンサルタント株式会社
委託名	宇都上遺跡・見帰遺跡の発掘調査業務委託
委託期間	平成30年5月21日～平成31年3月20日 (見帰遺跡の調査期間(12～1月)を含む)
調査期間	平成30年6月4日～平成30年11月28日
委託内容	発掘調査業務 1式 測量業務 1式 土工業務 1式
担当者	主任技術者 井之上公裕 主任調査員 新福 深 調査員 賦句 博隆 調査員 新納 弘恵 技術者 鎌田 公平 技術者 上川路直光
検査	中間検査 平成30年10月22日 一部完成検査 平成30年12月7日 完成検査 平成31年3月8日 (完成検査は見帰遺跡含む)

第4節 調査の経過

1 発掘調査

発掘調査の経過については、調査区を1～3区(第5図参照)と分け、月ごとに集約し記載する。

6月

- ・発掘調査開始・オリエンテーション
- ・調査区1(D～H-3～7区)
石塔調査、IV層上面遺構検出・調査・測量
- ・調査区2(E～I-7～14区)
II・III層上面遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ

7月

- ・調査区1(D～I-3～8区)
表土重機掘削、IV層上面遺構検出・調査・測量、IV層重機掘削、V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、VII層上面遺構検出・調査・測量

8月

- ・調査区1(D～I-3～8区)
IV層上面遺構検出・調査・測量、IV層重機掘削、V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、VII層上面遺構検出・調査・測量、旧石器時代確認トレンチ平成30年度-1～4T設定、トレンチ内VII～X層調査・遺物取り上げ
- ・調査区2(E～I-7～13区)
表土重機掘削、IV層上面遺構検出・調査・測量
- ・志布志市教育委員会相美伊久雄氏・志布志高等学校教職員遺跡見学

9月

- ・調査区1(D～I-3～8区)
IV層重機掘削、V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、VII層上面遺構検出・調査・測量
- ・調査区2(E～I-7～19区)
表土重機掘削、IV層上面遺構検出・調査・測量、IV層重機掘削、V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、VII層上面遺構検出・調査・測量、旧石器時代確認トレンチ(平成30年度-5・8・9T)設定、トレンチ内VII～X層調査
- ・調査区3(E～I-14～22区)
表土重機掘削、II・III層遺構検出・調査・測量、IV層上面遺構検出・調査・測量、IV層重機掘削、V・VI層遺構検出・調査・測量、VII層上面遺構検出・調査・測量、旧石器時代確認トレンチ(平成30年度-6・7・10・11T)設定、トレンチ内VII～X層調査

10月

- ・調査区2(E～I-7～19区)
表土重機掘削、IV層上面遺構検出・調査・測量、IV層重機掘削、V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ、VII層上面遺構検出・調査・測量
- ・中間検査

11月

- ・調査区2 (E～I-7～19区)
- ・IV層上面遺構検出・調査・測量, IV層重機掘削, V・VI層遺構検出・調査・測量・遺物取り上げ, VII層上面遺構検出・調査・測量
- ・航空写真撮影
- ・新東兎一南九州縄文研究会会長・本田道輝鹿児島考古学会会長・大木公彦鹿児島大学名誉教授現地指導

2 整理作業

出土した遺物に関しては、現場内に整理作業所を設置し、6～11月に遺物の洗浄・注記・一部接合を行った。

第5節 整理作業・報告書作成作業

1 作成体制

本報告書に伴う整理作業・報告書作成作業は、令和元年度に「鹿児島県埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業(民間委託)実施要綱」に基づき、株式会社バスコへ、見帰遺跡とともに整理作業及び報告書作成作業業務の委託を行った。整理作業・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 前迫 亮一
作成企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター 次長兼総務課長 野間口 誠 調査課長 中村 和美 第二調査係長 三垣 恵一
作成担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 藤島伸一郎
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 主幹兼総務係長 草水美穂子
作成指導	南九州縄文研究会会長 新東 晃一

2 委託内容

整理作業及び報告書作成作業業務の委託内容については、以下のとおりである。

委託先	株式会社バスコ鹿児島支店
委託名	宇都上遺跡・見帰遺跡の整理作業・報告書作成作業業務委託
委託期間	令和元年5月13日～令和2年3月13日 (見帰遺跡の整理作業期間(11～2月)を含む)
作業期間	令和元年5月27日～令和元年11月22日
委託内容	整理作業業務 1式 報告書作成作業業務 1式

自然科学分析業務 1式(宇都上遺跡のみ)

印刷・製本業務 1式(宇都上遺跡のみ)

担当者	主任調査員 池畑 耕一 調査員 関口 昌和 調査員 関口真由美 調査員 鈴木 敏中
-----	--

3 整理作業の経過

経過については、月ごとに集約して記載する。

5月	・遺物分類・図面整理, フローテーション
6月	・縄文土器・中世陶磁器・近世陶磁器分類・接合, 弥生土器・古墳土師器・石塔・中世陶磁器実測・遺構図編集・トレース, 土層断面図作成・トレース, 年代測定委託, 原稿執筆
7月	・縄文土器・近世陶器接合・復元, 縄文土器・石塔・中世陶磁器・近世陶器実測・拓本, 遺構図編集・トレース, 原稿執筆, 台帳作成
8月	・縄文土器実測・拓本・トレース, 縄文土器・中世陶磁器接合・復元, 遺構図編集, 遺構・遺物レイアウト図作成, 原稿執筆, 台帳作成
9月	・縄文土器・土師器・中世陶磁器・近世陶磁器実測・拓本・トレース, 中世陶磁器復元, 縄文土器塗色, 遺物レイアウト図作成, 原稿執筆, 台帳作成 ・南九州縄文研究会会長新東晃一氏整理指導
10月	・土器・陶磁器等トレース, 遺構・遺物レイアウト図作成, 原稿執筆, 修正・観察表作成 ・中間検査(16日)
11月	・遺物写真撮影, 遺構・遺物レイアウト図作成, 観察表・台帳作成, 原稿執筆・修正, 遺物収納
12月	・報告書印刷・製本委託
2月	・報告書印刷, 納入
3月	・完成検査
報告書作成指導委員会	6月11日, 8月6日, 10月3日, 11月7日 調査課長ほか7名
報告書作成検討委員会	6月14日, 8月19日, 10月9日, 11月26日 所長ほか5名

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理・地質的環境

宇都上遺跡は志布志市志布志町安楽に所在する。志布志市は、鹿児島県の東側にある大隅半島の南東部に位置する。北は曾於市、東から北東は宮崎県都城市・串間市、南は曾於郡大崎町、西は曾於市・大崎町と接し、南側は志布志湾に面している。志布志市は志布志・有明・松山の3町が合併して成立し、志布志町は東北部に位置する。

大隅半島の地形は、南北方向に走る山地、その間の丘陵、台地及び低地などで構成される。東側の山地は、志布志湾北側から宮崎県に突出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。西側の山地は北部の霧島火山の分脈から南部の高隈山地へと連なっている。

地質は大部分が高隈山周辺に分布している新世代古第三紀の日南層群を基盤とし、その上に鹿児島湾口にある阿多カルデラの火砕流、湧泉にある始良カルデラの入戸火砕流などが堆積し、丘陵や台地が広く分布するシラス地形となっている。さらにその上は鬼界カルデラ・開聞岳・池田・霧島山系・桜島などの火山噴出物でおおわれている。

火砕流堆積物は、大小の河川で開析されて谷を形成し、河川は合流し、西側は鹿児島湾へ、東側は志布志湾に注いでいる。西側へ注ぐ河川は山地が海に迫っているため距離が短い、東側へは長い川が多い。東側は北から安楽川・菱田川・持留川・肝属川などがある。下流には肝属平野などの平野が形成され、志布志湾岸には幅が1～1.5kmの砂丘が約16kmに延びている。

志布志町は東側を鰐塚山地が囲み、そこから北・西と台地が延び、南側は志布志湾に面している。台地を河川が分断しているが、小河川は次第に合流し、北から前川・安楽川・菱田川となって志布志湾に注いでいる。志布志港は現在、関西との間に旅客フェリーが就航し、同時に東南アジアなどの物流交易拠点港だが、古くは都城や大隅半島中央部など内陸部からの物産交流港だった。

宇都上遺跡は志布志湾から直線距離約3.8kmの安楽川左岸台地端部、標高約60mの河岸段丘に立地している。安楽川は北東側から流れてくるが、遺跡近くで北側から流れている高下谷川・尾野見川と合流し、深い峡谷となる。ここから、大きくS字状に蛇行しながら6km先の河口へ向かっている。遺跡のある大迫台地端部は急崖をなして低地へ落ち、低地と海の間は商店街になっている。現在の海岸線は埋め立てで沖へ延びているが、古くは台地が海岸線と接していた。台地は標高70～80mの平坦地形だが、安楽川に接する方は河岸段丘となっている。

台地中央を主要地方道志布志福山線が横切っており、かつて台地南西下の低地から高下川に沿って国鉄志布志線が走っていたが、昭和62年に廃線となっている。

第2節 歴史的環境

大隅半島北部の曾於市・志布志市は『縄文銀座』と呼ばれるほど縄文時代の遺跡が多い。それに反し、弥生時代以降になると遺跡数は減少する。これは山地や台地が広く、低地が少ないという地形が影響しているものと思われる。安楽川流域沿いには、稲荷迫遺跡・高吉B遺跡・中原（曲瀬）遺跡など多くの遺跡があり、本遺跡同様、旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。近年、都城・志布志道路や東九州自動車道路建設に先立つ調査で多くの遺構・遺物が発見されている。

旧石器時代

堆積が厚いこともあって、遺跡数は少ない。宇都上遺跡ではナイフ形石器文化期層で加工痕のある剥片が出土している。ナイフ形石器文化期では稲荷迫遺跡で剥片尖頭器が、高吉B遺跡では三稜尖頭器が出土し、それぞれ礫群1基が検出されている。見綿遺跡ではナイフ形石器・磨石・蔽石が出土している。

細石刃文化期の石器は稲荷迫・中原（曲瀬）・見綿・次五遺跡などで出土している。次五遺跡では細石刃核を含むブロックが検出されているが、それぞれで石材の違いがみられる。次五遺跡・中原（曲瀬）遺跡の細石刃核は陸原タイプである。見綿遺跡では細石刃・磨石・蔽石・台石が出土している。曲瀬遺跡のやや北にある下原遺跡でも礫群や細石刃核などが発見されている。

縄文時代

前川・安楽川沿いには連続として縄文時代の遺跡が多く存在している。草創期の遺跡として、曲瀬遺跡では有舌尖頭器が採集され、安楽小牧B遺跡では隆帯土器などが出土している。志布志町内ではほかにも隆帯土器期の舟形石組遺構や炭化ドングリの入った貯蔵穴が検出された東黒土田遺跡や、集石の検出された鎌石橋遺跡などがある。

早期の遺跡は多く、宇都上遺跡周辺でも安楽川流域に宇都上遺跡のほかには下原・下原B・稲荷上・稲荷迫・柳・高吉B・養輪・小迫上・弓場ケ尾・鳥島・曲瀬・大渡B・百堂穴・見綿など多くの遺跡がある。下原・稲荷迫・高吉B・弓場ケ尾遺跡などでは前半の集落跡が検出されている。下原遺跡では前平式・加葉山式・吉田式・石坂式・下刺釜式・桑ノ丸式・押型文・苦浜式土器などとともに堅穴住居跡・集石遺構・土坑・埋設土器等が検出されている。ほかに磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・蔽石などの石器も出土している。稲荷迫遺跡では加葉山式・吉田式・石坂式土器などとともに集石遺構64基・連穴土坑3基・土坑2基などが検出されている。ほかに岩本式・倉園B式・手向山式・平袴式・塞ノ神Aa式などの土器と、打製石鏃・削器・石槍・磨製

石斧などの石器も出土している。高吉B遺跡では岩板式・前平式・石坂式土器とともに集石遺構 141 基・連穴土坑 4 基・土坑 8 基・土器埋設遺構 1 基などが検出されているが、連穴土坑の中から石坂式土器が出土しており、連穴土坑の下限を示すうえで重要である。見婦遺跡では石坂式・下刺釜式・押型土器や、打製石鏃・磨石・蔽石などの石器が出土した。弓場ヶ尾遺跡では加栗山式・吉田式・石坂式土器などとともに堅穴状遺構 2 軒・集石遺構 4 基・土坑 6 基が検出され、打製石斧・石皿・磨石も出土している。稲荷上遺跡では塞ノ神Aa式・平椀式土器とともに集石遺構 3 基が検出されているが、耳栓状土製品・打製石斧も出土している。船迫遺跡では下刺釜式土器とともに打製石鏃・磨石・蔽石などが出土している。炭床遺跡では塞ノ神A式土器とともに集石遺構 3 基が検出されている。

前期から中期にかけては遺跡数が少なくなる。前期では、百堂穴や鳥居下・別府（石圃）・船磯遺跡などで竈式・曾畑式土器が出土している。中期も、高吉B・中原（曲瀬）・船磯・志布志城跡・高濱遺跡で深溝式土器などが出土している程度である。見婦遺跡では落とし穴と思われる土坑 5 基と打製石鏃が発見されている。

後期では、中原（曲瀬）遺跡で中期末から後期前半の阿高系土器・岩崎下層式・南福寺式・指室式土器などが多く出土し、磨消縄文土器や、疑似縄文土器なども含まれている。特に瀬戸内の福田KⅡ式土器の完形品や中津式・彦崎KⅠ式・津雲A式土器などの出土は文化の伝播・交流を考える上で貴重である。このほか松山式・市来式土器なども出土している。石器では打製石鏃や石槍・石匙などがみられないのに対し、石鏃 465 点・土鏃 1 点が出土しているのは、生業を考える上で興味深い。他に磨製石斧・打製石斧・蔽石・磨石・石皿が出土している。円盤形土製品が 1081 点、円盤形石製品が 18 点出土しているのも用途が分からないのが興味深い。勾玉・生殖器形・凹面形などの軽石製品も出土している。山角B遺跡では中岳Ⅱ式土器とともに集石遺構が検出され、西平式土器・打製石鏃も出土している。船迫遺跡では中岳Ⅱ式土器・打製石鏃・磨石・蔽石・軽石製品などとともに落とし穴 2 基が検出されている。稲荷遺跡で土坑 11 基が検出され、市来式・丸尾式・北久根山式・中岳Ⅱ式土器などが出土している。宮脇遺跡では市来式土器、炭床遺跡では西平式土器・中岳Ⅱ式土器・打製石鏃、安良遺跡では中岳Ⅱ式土器が出土している。見婦遺跡では市来式・納曾式・辛川式・西平式・丸尾式・中岳Ⅱ式土器とともに磨石・蔽石・石鏃・円盤形土製品などが出土している。

晩期の遺跡も多いが、規模は小さい。稲荷上遺跡で上加世田式・入佐式・黒川式土器とともに土坑 3 基が発見されている。稲荷遺跡で上加世田式・入佐式・夜白式土器などとともに打製石鏃・石槍・石匙・石鏃・削器・

播器・楔形石器・穿孔貝・砥石・磨製石斧・打製石斧・礫器・石皿・磨石・蔽石・凹石・石鏃など多種の石器が出土し、孔列文土器も多い。山角B・炭床遺跡では黒川式・刻目突帯文土器・打製石斧が出土し、山角B遺跡では磨製石斧・勾玉も出土している。小迫・飛渡遺跡では黒川式土器とともに孔列文土器が出土し、安良遺跡では入佐式・黒川式土器とともに磨製石斧・打製石斧・磨石が出土している。

弥生時代

安良・高吉B・柳遺跡などでは中期の堅穴建物跡が、船迫遺跡では中期の掘立柱建物跡が検出されている。

稲荷遺跡では入来Ⅰ・Ⅱ式土器期の土坑墓が 2 基検出され、前期の高橋式、中期の吉ヶ崎式・山ノ口式土器などとともに、磨製石鏃・扁平片刃石斧などの石器や、前山Ⅱ式・須玖Ⅱ式土器など瀬戸内や北九州の影響を受けた土器も出土している。

高吉B遺跡では堅穴建物跡 7 軒、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 8 基が検出されているが、堅穴建物跡群と、掘立柱建物跡群とは区域が分かれている。土坑の中には土器によって閉塞された横穴をもつものもある。土器の中には北九州・瀬戸内・東九州系のものも含まれている。土器のほかこ丁子頭土製勾玉・磨製石鏃・打製石鏃・磨石・蔽石・石皿・砥石などの石器もある。

船迫遺跡では掘立柱建物跡 4 棟が検出され、山ノ口式土器、磨製石鏃・磨石・蔽石などが出土している。稲荷上遺跡では入来式土器が、安良遺跡では山ノ口Ⅱ式土器が出土している。柳遺跡では長方形の埴矢住居跡が検出され、山ノ口式土器や土製勾玉・軽石製品が出土している。出土状況ははっきりしないが、大正年間に土橋遺跡では中広形銅矛が採集されている。

古墳時代

志布志湾の北端から南に突き出たダグリ岬には墳長約 80 m で葺石のある前方後円墳、飯盛山古墳がある。墳丘の高さは、後円部が 11.5 m、前方部が 4.5 m である。主体部は堅穴石室で、多くの円筒埴輪、壺形埴輪片が出土し、ガラス製勾玉・丸玉・小玉が採集されている。4 世紀末から 5 世紀初頭に築かれている。

菱田川の河口近くにある小牧古墳群は、円墳 4 基で構成され、周辺から 7 世紀の須恵器が採集されている。六月坂横穴墓では横穴墓とともに 7 世紀代の土師器、須恵器などが出土し、安良遺跡では地下式横穴墓が検出されている。

この時期の集落遺跡は少ない。安良遺跡では 7 世紀頃の堅穴建物跡 13 軒と溝状遺構 2 条が検出され、住居内から須恵器や鉄鏃・刀子も出土し、多くの礎の底には木炭灰がある。稲荷遺跡では、中期中葉から後葉の堅穴建物跡 4 軒、土坑 1 基が検出され、勾玉・菅玉も出土している。船迫・山角B・炭床遺跡では笹貫式土器が、宮

脇道跡では辻堂原式・笹貫式土器と7世紀頃の須恵器が出土している。

古代

古代の志布志は日向国諸県郡に属していた。前川河口にある宝満寺跡は神亀年間(724～729)に創建された、西海の華と称されたほどの寺だったが、今は境内に五輪塔群が残っているだけである。山宮神社も和銅2年(709)に建てられたという。水迫横穴墓では須恵器の蔵骨器が出土している。

古代村落の様相ははっきりしていないが、安良遺跡では土師器・黒色土器・須恵器とともに黒書土器・焼塩土器も出土している。稲荷道跡では土師器・焼塩土器・輪の羽口などが、宮脇遺跡では木葉底の土師器甕や焼塩土器・須恵器が出土している。

中世

志布志は港町として栄え、『志布志津』と呼ばれた。

国指定史跡である志布志城跡は、前川の河口近くにあり、内城・松尾城・高城・新城からなる。それぞれの城はシラス台地の端部に立地し、いくつかの深い壕で区画された郭からなり、それぞれの郭では、建物跡・溝状遺構・土坑・土塁・門跡などが検出され、土師器・青磁・白磁・青花・東播系埴鉢・瓦質土器・備前焼埴鉢・天目碗・銭貨など主として14世紀半ばから15世紀の遺物が出土している。ベトナム・タイなど東南アジア産のものもあり、当時の広範な交易を物語っている。

山宮神社近くには12世紀後半に築城された志布志城の支城である安楽城跡がある。山宮神社境内では明治23年と25年に五輪塔が合わせて6基掘り出され、26年には蔵骨器の納められた石室が発見された。蔵骨器は青白磁の四耳壺で、副葬品として菊花紐の山吹あるいは草花飛雀鏡1面、鉄刀1口、土師器皿約10個、青白磁合子3個、同小壺2個、鉄塊1須どがある。石室はすでないが、出土品の一部と出土状況の記録が山宮神社に保管されている。14世紀に創建された大慈寺の境内には開山玉山和尚の墓(1351年)がある。

集落跡としては、宇都上遺跡で常滑焼・備前焼などの国内産陶器、白磁・龍泉窯系青磁などの輸入陶磁器が出土している。安良遺跡では掘立柱建物跡・堅穴建物跡・土坑群などが検出され、土師器・瓦器埴・青磁・白磁・青白磁合子・東播系埴鉢・須恵質土器・瓦質土器・備前焼埴鉢・常滑焼壺・黄釉鉄絵盤・石鍋・柱状高台皿・炭化米塊・炭化種子などが出土している。志布志海岸には今でも砂鉄が薄く堆積しているが、これを原料とした製鉄遺跡が前川・安楽川沿いに存在している。前川河口にある宝満寺跡内にある宝満製鉄遺跡では土坑・排滓場が検出され、土師器・埴鉢・輪の羽口・製錬滓・台石・巖石などが出土している。

近世

志布志城跡の東側に地頭仮屋が置かれ、その周辺に武家屋敷が建ち並んで『籠』を形成していた。志布志湊の周辺は『志布志千軒町』と呼ばれ、南は大隅半島南部から琉球、北は大坂などとの流通が盛んであった。藩米などの集積・積出港で、前川河口には津口番所が置かれ、藩政末期には密貿易も行われていた。この周辺では陶磁器などが出土している。

宝満寺跡では石積遺構や基礎石・柱穴などが検出されているが、時期がはっきりしない。苗代川焼・龍門司焼などの薩摩焼、伊万里焼、土師質土器、琉球通宝や加治木銭・慶長通宝などの古銭、石製品、鉄製品などが出土している。稲道遺跡では道跡と思われる帯状硬化面が検出され、陶磁器とともに二分金も出土している。安良遺跡では薩摩焼・肥前陶磁器などが出土している。

前川、安楽川などの中小河川沿いには近世・近代の東谷や荒田遺跡など多くの製鉄関連遺跡が確認されていることからこれらの河川を利用して砂鉄を運搬し、製鉄作業が行われていたことが考えられる。安良遺跡でも近代の磁器とともに輪の羽口・鉄滓・増場が出土している。

(参考・引用文献)

志布志町教育委員会

1980『弓場ヶ尾地区一帯輪道跡・柳道跡』

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書

1985『志布志の埋蔵文化財』

1985『中原道跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

1988『飛渡道跡・島廻道跡・白木原道跡』

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

2003『宮脇道跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)

2003・2004『宝満寺跡・宝満製鉄道跡・牟田道跡・弓場ヶ尾道跡』

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(31)・(33)

2003『稲荷上道跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(32)

2005『志布志城跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

2005『弓場ヶ尾道跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(35)

志布志市教育委員会

2013『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

2013『(伝)六月坂横穴墓』

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

2013『山角B遺跡・炭床道跡』

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

2018『志布志城跡(内城跡)1～9次調査』

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)

2018『次五道跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2012『稲荷道跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)

2014『船道遺跡・高古B遺跡』

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)

鹿児島県教育委員会(公財)埋蔵文化財調査センター

2019『見掛道跡』

(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(23)



第3図 周辺の道跡 (1/25,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地(志布志市)	時代	地層	遺構・遺物等	備考
1	立山遺跡	有明町伊崎田立山・野内・平・宝太郎	古墳	台地		
2	下原日遺跡	志布志町内ノ倉字下原	巨石器、縄文早・後、弥生中	丘陵	縄器、細石刀核、壱穴埴輪物、土灰・甌石・埋設土器、前平式・加葉山式、吉田式・石版式、下割式・桑ノ丸式・押型文・石版式・土器、打製石斧・磨製石鏃、打製石斧・磨石刀核、磨石・磨石	
3	稲荷上遺跡	志布志町安楽字稲荷上	縄文早・後、弥生中、古墳	台地	集石・土灰、平形式、兼束式Aa式・土加世田式・人形式・黒川式土器、瓦輪、打製石斧、人束式土器	志布志町埋文(32)
4	稲荷日遺跡	志布志町安楽字稲荷日・牧	巨石器、縄文早・後・晩、弥生、古墳、古代	台地	縄器・銅片尖頭器・細石刀・細石刀核、壱穴埴輪物・集石・漆穴土灰・土灰・土灰層、畷木式・加葉山式・吉田式・石版式・平形式・市束式・中居日式・土加世田式・孔阿土器、石鏃、磨製石斧・磨石刀核	鹿児島県埋文セ(160)
5	甲遺跡	志布志町安楽字甲	縄文早、弥生中	台地	集石、吉田式・石版式・押型文・赤赤土器、磨石・磨石、壱穴埴輪物、山ノ口式土器、土製瓦玉、軽石製品	志布志町埋文(3)
6	高輪遺跡	志布志町内ノ倉字高輪	縄文早、弥生中	台地	集石、吉田式土器、石鏃、山ノ口式土器	志布志町埋文(3)
7	礼埴遺跡	志布志町内ノ倉字礼埴	縄文後、弥生中	台地	山ノ口式土器	志布志町埋文(3)
8	土俵遺跡	有明町野井倉字土俵・下原・土原・合所・下口・谷沢、有明町伊崎田字津・西ノ迫	縄文後、弥生中	台地	中込形銅子	青森8-2
9	小迫下遺跡	志布志町安楽字小迫下・南迫	縄文早・後・株	台地		平成16年確認調査
10	宇都上遺跡	志布志町安楽字宇都上・高吉	巨石器、縄文早、弥生中、古墳、中世、近世	台地	前平式・志風頭式・加葉山式・小軟3A式・孔ノ丸埋輪・石版式・前割形式・下割式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・寒ノ神A式土器、打製石鏃・磨製石鏃・削器・磨製石斧・磨石・高橋式・人束式土器、土師器・土師土器・東海系瓦器、陶器・骨器、常滑焼・瀬戸焼、青磁・白磁・中国陶器・タイ産陶器・染付、磁石、軽石製品、石塔、鉄製品、鎌倉焼、肥前産陶磁器、漆器	本報告書
11	高吉日遺跡	志布志町安楽字宇都上・茶馬橋・南堤	巨石器、縄文早・中・後・晩、弥生中、中世～近世	台地	縄器、二種尖頭器、集石・土灰・漆と七穴、前平式・石版式・押型文・手向山式・宮浜式・埋輪式・中居日式、打製石鏃・石鏃、壱穴埴輪物・壱穴埴輪物・土灰・横穴もつ土器、山ノ口式土器・土製瓦玉・網皮和印石	鹿児島県埋文セ(180)
12	弓橋ノ尾遺跡	志布志町結字弓橋ノ尾	縄文早、古墳	台地	壱穴伏遺構・集石・土灰、加葉山式・吉田式・石版式土器、磨石・石鏃、打製石斧	志布志町埋文(35)
13	稲荷倉遺跡	志布志町結字稲荷倉		台地		
14	高輪遺跡	志布志町結字高輪	縄文早、弥生中	台地	集石、前平式・吉田式・石版式・平形式土器、山ノ口式土器	志布志町埋文(13)
15	鹿心遺跡	志布志町安楽字鹿心	古代	台地		平成11年鳥取県分布調査
16	西心遺跡	志布志町安楽字西心	縄文後	台地		平成15年鳥取県分布調査
17	中原(曲瀬)遺跡	志布志町安楽字中原	巨石器、縄文早・中・後	台地	細石刀核、阿高式・南極寺式・前割式・磨製縄文・松山式・市束式土器、石鏃、磨製石斧・打製石斧、円盤形土製品	志布志町埋文(9)
18	曲瀬遺跡	志布志町安楽字中原・西迫・中渡	縄文早・後、弥生	台地	有尖頭器、指型式・市束式土器、磨石、弥生土器	
19	小瀬入遺跡	志布志町安楽字中原小瀬・西迫	縄文後	台地	市束式土器、打製石斧、磨製石斧	
20	小瀬日遺跡	志布志町安楽字小瀬・中原	縄文後、弥生	台地	指型式・市束式土器、弥生土器、打製石斧	
21	大久保遺跡	志布志町安楽字大久保	縄文、弥生	台地		
22	大渡日遺跡	志布志町安楽字大渡	縄文早・後	丘陵	寒ノ神式・阿高式・出水式土器、即石・石斧・石鏃	
23	船迫遺跡	志布志町安楽字船迫・大渡	縄文早・後、弥生中、江戸	台地	漆と七穴、下割式・中居日式土器、石鏃・磨石・磨石、壱穴埴輪物・石鏃、山ノ口式土器、磨製石鏃、漆器、二分金・陶磁器	鹿児島県埋文セ(180)
24	南屋遺跡	志布志町結字南屋	縄文、古墳、中世	台地		平成14年確認調査
25	橋ノ木遺跡	志布志町結字橋ノ木・五里ノ迫	弥生中	丘陵		
26	瓶渡遺跡	志布志町結字瓶渡	縄文後、弥生中、古墳後	台地	黒川式・孔列土器、石鏃・石鏃、打製石斧・磨製石斧・扇形石器、石鏃・磨石、人束式土器	志布志町埋文(13)
27	大久保日遺跡	志布志町安楽字大久保	弥生	台地		平成11年鳥取県分布調査
28	上原遺跡	志布志町安楽字上原	弥生	台地		平成11年鳥取県分布調査
29	山角日遺跡	志布志町安楽字山角・坂床	縄文早・後、古墳後	台地	集石、西平式・中居式・黒川式・美奈式土器、石鏃、打製石斧・磨製石斧・瓦玉、原貫式土器	志布志町埋文(11)
30	山角入遺跡	志布志町安楽字山角	縄文後	台地	西平式土器、打製石斧、石鏃・磨石	
31	院日遺跡	志布志町安楽字院	縄文早・後・晩、古墳後	台地	集石、寒ノ神A式・西平式・中居式・黒川式・美奈式土器、石鏃、打製石斧、原貫式土器	志布志町埋文(11)
32	大久保入遺跡	志布志町安楽字大久保	縄文、弥生	丘陵		
33	大久保日遺跡	志布志町安楽字大久保・七本松	弥生	台地		
34	上原遺跡	志布志町安楽字上原	縄文後	台地		
35	百太郎遺跡	志布志町安楽字百太郎	縄文後、弥生	台地	縄式土器、紐骨、磨製石鏃、磨製石斧	埋文調査センター一報(22)
36	見崎遺跡	志布志町志布志見崎	巨石器、縄文早・後	台地	ナイフ形石器、細石刀、ハンマーストーン、漆と七穴、石版式、下割式・西平式土器、石鏃・磨石・円盤形土製品	
37	浦尻遺跡	志布志町結字浦尻	縄文後、弥生	丘陵	弥生土器、磨製石鏃	

番号	遺跡名	所在地(志布志市)	時代	地形	遺構、遺物等	備考
38	漁田遺跡	志布志町帖字漁田、西中尾	縄文、弥生	台地		昭和62年確認調査
39	七本松古遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
40	七本松A遺跡	志布志町安楽字七本松	弥生	台地		平成11年農政分布調査
41	高松遺跡	志布志町安楽字高松	弥生	台地		平成5年確認調査
42	二重塚遺跡	志布志町安楽字二重塚、七本松	弥生	台地	弥生土器、打製石斧	
43	安楽城跡	志布志町安楽字宮下	中世	台地	礎石墓	建久年間(1190～1198)築城
44	山宮神社	志布志町安楽字宮下	古代、中世	台地	礎石礎、和鏡、鹿刀、青白磁焼耳垂、合子他	神鏡(南草堂文集傳録)天正7年因指定
45	宮内遺跡	志布志町安楽字宮内、下原	弥生、古代	台地		
46	宮ノ上遺跡	志布志町安楽字宮之上	古代	台地		平成12年東九州道分布調査
47	天塚遺跡	志布志町安楽字天塚	縄文、古代	台地		
48	宮脇遺跡	志布志町安楽字宮脇、宮下	縄文後・戦、古墳後、古代	台地	壱穴状遺構、指環式・市来式・雲井式土器、土師器、須恵器	志布志町境文庫(28)
49	水神松遺跡	志布志町安楽字水神松、二期丸、小真出所	古墳	平地	礎、磨製石斧	
50	安良遺跡	志布志町安楽字勢園	縄文後・戦、弥生中、古墳後、古代～近代	台地		志布志市境文庫(7)
51	安楽小教	志布志町安楽字小教	縄文早	台地		
52	安楽小教古	志布志町安楽字小教	旧石器、縄文早期、早、弥生	台地		
53	小教古墳群	志布志町安楽字小教	古墳後	台地	円墳4基、土師器、須恵器、磨石加工品	
54	次五遺跡	有明町野井赤土丸、横塚	旧石器、縄文早、古代	台地		志布志市境文庫(13)
55	大原遺跡	志布志町安楽字権理原	古代	台地	土師器、須恵器	酒蔵
56	権理原遺跡	志布志町安楽字権理原	弥生、古代	台地	弥生土器、土師器	
57	Hへ代遺跡	志布志町安楽字Hへ代	弥生、古墳	台地		平成8年確認調査
58	島坪下遺跡	志布志町安楽字島坪下	縄文早・前	台地	縄文土器	
59	別府(石籠)遺跡	志布志町安楽字別府	縄文早・前、中・戦、弥生中	台地	集石、吉田式・石版式・平形式・壺ノ神式・轟式・雲井式・岩崎式・黒川式土器、土偶ノ、石籠、石斧、石匙、スクレイパー、磨石、磁石、石鏝、異形石器	志布志町境文庫(11)
60	別府上遺跡	志布志町安楽字別府上	古代	台地	土師器	
61	水ヶ道橋穴墓	志布志町志布志字水ヶ道	古代	丘陵	土師器、須恵器遺	昭和8年発見
62	六月坂橋穴墓	志布志町志布志字水ヶ道	古墳	丘陵	土師器、須恵器、坪倉、坪倉	明治42年発見小
63	船越遺跡	志布志町安楽字船越、水ヶ道	縄文前・中	海浜	轟式土器	
64	外塚遺跡	志布志町志布志字外塚	縄文早	台地		
65	大西遺跡	志布志町志布志字大西	古代	海浜	縄文土器	
66	愛甲轟墓	志布志町志布志二丁目	近世	沖積平野		昭和36年県指定
67	大恩寺跡(即心院)	志布志町志布志二丁目	中世～近代	沖積平野	仁王塚	興因元年(1340)開山 昭和46年県指定
68	大恩寺開山墓	志布志町志布志二丁目	中世～近代	沖積平野		大恩寺志布志庵跡 大恩寺開山墓
69	志布志城(新堀)跡	志布志町帖字宇都ノ上	縄文早・中、中世	台地	壺ノ神式土器、石籠、埴、土器、礎、焼石、青磁、白磁、染付、陶器(中国・ベトナム・高麗、備前産)	志布志町境文庫(14)・(34)
70	志布志城(高堀)跡	志布志町帖字高堀	中世	台地	埴、土器、青磁、白磁、染付、陶器(タイ・中国・常滑焼、備前産)、金属製品、貝貨	志布志町境文庫(34)
71	志布志城(松尾城)跡	志布志町帖字松尾	中世	台地	青磁、白磁、染付、陶器(中国・瀬戸焼、東焼、明三彩、大日本窯、唐津焼)、磁石、磁石、銅製品、鉄製品	平成17年因指定 志布志町境文庫(34)
72	志布志城(内堀)跡	志布志町帖字内堀	縄文、弥生、中世	台地	石籠、埴、土器、虎口、土師器、青磁、白磁、染付、陶器(中国・タイ・瀬戸焼、備前産、唐津焼)、瓦質土器、金属製品、古銭、鉄滓、赤黒三彩	志布志町境文庫(34) 01・080・(12)
73	小洲遺跡	志布志町帖字小洲	縄文早・後	丘陵	岩崎下層式・岩崎上層式・指環式・市来式・泉野式土器、石斧、叩石、石皿、石鏝	備考古(5)
74	高深遺跡	志布志町帖字高深	縄文早・戦、近世	河川		
75	宝満寺跡	志布志町帖字宝満	古代、中世、近世、近代	河原段丘	土師器、土坑・溝埴壇、伊賀、土師質土器、陶磁器、須口、製煉滓、台石、磁石、古銭	志布志町境文庫(31)・(33)
76	向川原遺跡	志布志町帖字向川原	縄文早	丘陵	縄文土器	

第3節 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

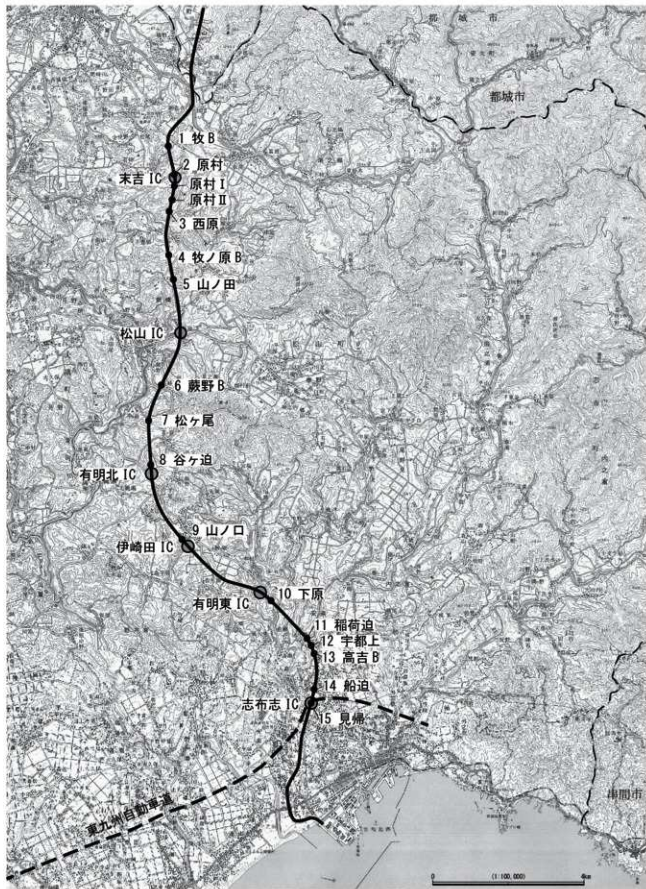
都城志布志道路は鹿児島県及び宮崎県に連なる道路である。その鹿児島県部分では、平成11年度から16年度にかけて末吉IC～有明北IC間、平成21年度から令和元年度にかけてその他区間、計15遺跡の発掘調査が行

われた。ここでは概要を下の表に示す。なお、今年度まで発掘調査や整理作業を行っている遺跡もあり、今後変更などが伴う可能性がある。詳細は各報告書を参考にされたい。

第2表 都城志布志道路に係る鹿児島県内の遺跡

番号	遺跡名	所在地	発掘調査	整理作業・報告書作成	時代・時期	主な遺構	遺跡の概要	主な遺物
1	牧B	鹿児島市 高土町 40474	令和元年度	令和2年度 整理作業予定	縄文早期	土坑6基、埋設土器1基	石版式・下割式・押型土器・打製石・磨石	石版式・下割式・押型土器・打製石・磨石
			令和2年度 発掘作業予定	縄文中～後期	縄文中期～後期	縄文中期～後期	壺穴建物跡1基、ピット1基	御印式・中居式・入形土器、打製石・打製石片
					弥生～中期	古代	阿波式・阿波式土器	阿波式土器、山ノ口土器
							土坑1基、ピット1基	土師器・黒色土器入物
							縄文時代後期の土器を伴う壺穴建物跡を1基検出している。中央土坑には土器以外に傘の骨を多く含んでいる。復元調査中であり、今後遺構等増加する可能性がある。	
2	原村	鹿児島市 末吉町 高土町 5074	平成29年度	令和元年度 令和2年度 発行予定	旧石器	-	角礫状石器・削片	角礫状石器・削片
			平成30年度	縄文早期	壺穴建物跡2基、集石41基、土坑14基、溝と土坑2基、溝穴土坑2基	石版式・御平式・加蓋式・吉田式・石版式・押型式・打製石・打製石片、磨石、スクリン、角礫製骨片・打製石・磨石・石器・炭灰石製品・砥石・石槌	石版式・御平式・加蓋式・吉田式・石版式・押型式・打製石・打製石片、磨石、スクリン、角礫製骨片・打製石・磨石・石器・炭灰石製品・砥石・石槌	
				縄文中～中期	溝と土坑5基、土坑2基	-	-	
				縄文後期	壺穴建物跡2基、土坑13基、溝穴遺構1基	扇形溝内壺土器・中居式・御印式・上割式土器、打製石・磨石・砥石	扇形溝内壺土器・中居式・御印式・上割式土器、打製石・磨石・砥石	
				縄文晩期	-	入形式・黒川式・阿波式・組織土器、打製石・打製石片・磨石	入形式・黒川式・阿波式・組織土器、打製石・打製石片・磨石	
				弥生～中期	土坑2基	扇形式・入形1・白式・山ノ口1・東内系土器、磨製石・与玉	扇形式・入形1・白式・山ノ口1・東内系土器、磨製石・与玉	
				古墳	土坑1基	成川式土器、鉄鏝	成川式土器、鉄鏝	
				古代	土坑1基、製鉄炉遺構1基	須磨器、土師器、磨石、鏡、鉄片、鉄釘、鉄舟、磨石	須磨器、土師器、磨石、鏡、鉄片、鉄釘、鉄舟、磨石	
				中世	土坑2基、溝穴遺構1基	白磁、青磁	白磁、青磁	
				近世	土坑2基、溝穴遺構12基	漆器、磨製石、寛永通宝、牛セウ	漆器、磨製石、寛永通宝、牛セウ	
3	西原	鹿児島市 末吉町 高土町 5092	平成14年度	平成19年度発行 第七報告書(120)	縄文早期	集石1基	石版式・壺ノ柄式土器	石版式・壺ノ柄式土器
				縄文後～晩期	-	指形式・夜日式土器	指形式・夜日式土器	
				弥生～古墳	土坑5基	弥生土器	弥生土器	
			平成14年度	第七報告書(120)	縄文早期	-	御平式・平刷式土器	御平式・平刷式土器
			平成15年度	平成16年度発行 第七報告書(120)	縄文早期	集石2基	押型式・壺ノ柄式土器	押型式・壺ノ柄式土器
				近世	土坑5基	石版式・壺ノ柄式土器、水車通宝	石版式・壺ノ柄式土器、水車通宝	
				遺末吉IC付近に広がる遺跡である。遺跡の範囲は年度により3区に分かれており、区内の範囲では、縄文時代中期から晩期にわたる多くの土坑や壺穴建物跡等の遺構及び遺物が発見されている。各遺跡の発見経緯の出土や古代製鉄遺構の検出も注目される。				
			平成13年度	平成19年度発行 第七報告書(120)	旧石器	-	埋土器類・ナイフ形石器	埋土器類・ナイフ形石器
				縄文早期	集石17基、大型土坑1基	押型式・壺ノ柄式土器、奥形石器	押型式・壺ノ柄式土器、奥形石器	
				縄文後期	壺穴建物跡1基、土坑17基	中居式土器、磨玉	中居式土器、磨玉	
	古代～中世	溝穴遺構1基	土師器	土師器				
			旧石器時代では、三塚土器類の製作場所と考えられるブロッグが2基検出されている。縄文時代後期では、1基の壺穴建物跡から中居式土器や磨玉が出土している。					
4	牧ノ原B	志布志市 松山町 新橋 字牧ノ原	平成14年度	平成19年度発行 第七報告書(120)	旧石器	-	ナイフ形石器	ナイフ形石器
				縄文前～中期	溝と土坑1基	-	-	
				縄文後～晩期	-	中居式土器	中居式土器	
			旧石器時代では、ナイフ形石器が1点出土している。縄文前～中期には、黒色土器を主体に黒土を含んだ土坑が検出されている。					
5	山ノ田	志布志市 山ノ田町 新橋 字山ノ田	平成15年度	平成18年度発行 第七報告書(160)	縄文早期	集石6基、土坑1基	吉田式・壺ノ柄式土器、石槌・石巻・磨石・削片石器等	吉田式・壺ノ柄式土器、石槌・石巻・磨石・削片石器等
			平成13年度	平成17年度発行 松山町報告書(16)	縄文早期	集石5基	下割式・平刷式・壺ノ柄式土器、石槌	下割式・平刷式・壺ノ柄式土器、石槌
				縄文早期の集石が多く検出された遺跡である。遺物は縄文早期後半のものが多い。				
			平成15年度	平成18年度発行 第七報告書(160)	旧石器	磯野5基、ブロッグ15基	ナイフ形石器・三塚土器類・台形石器・削片石器等	ナイフ形石器・三塚土器類・台形石器・削片石器等
6	磯野B	志布志市 松山町 新橋 字磯野	平成16年度	縄文早期	集石36基、ブロッグ18基、土坑2	吉田式・石版式・打製石・壺ノ柄式土器、打製石・磨製石片・打製石片・磨石・叩石・砥石	吉田式・石版式・打製石・壺ノ柄式土器、打製石・磨製石片・打製石片・磨石・叩石・砥石	
				縄文中～後期	集石1基	阿高式・指形式土器	阿高式・指形式土器	
				弥生～中期	-	入形式土器	入形式土器	
				旧石器時代では本格的な旧石器時代の遺構・遺物が出た土遺跡である。縄文時代早期においても、計10基以上の集石やブロッグが検出されている。				
			平成15年度	平成18年度発行 第七報告書(160)	縄文早期	集石9基	御平式・石版式・壺ノ柄式土器、打製石・磨石	御平式・石版式・壺ノ柄式土器、打製石・磨石
				縄文後期	土坑1基	黒川式土器、打製石・磨製石片・打製石片	黒川式土器、打製石・磨製石片・打製石片	
	古代	壺穴建物跡跡1棟、溝穴遺構3基、砥石遺構1基	土師器、須磨器、後塚式	土師器、須磨器、後塚式				
	縄文時代早期の集石が多く検出されている。古代の竈立建物跡も1棟検出されている。							
8	谷ヶ迫	志布志市 有明町 伊田 字谷ヶ迫	平成15年度	平成18年度発行 第七報告書(160)	縄文後期	-	指形式土器	指形式土器
			縄文時代後期から晩期にかけての土器が出土している。					
9	山ノ口	志布志市 有明町 伊田 字山ノ口	平成25年度	平成26年度	旧石器	-	削片	削片
			平成26年度	平成27年度	縄文早期	集石2基、ブロッグ2基	加蓋式・下割式・壺ノ柄式・山形押型土器、石槌・石巻・スクリン	加蓋式・下割式・壺ノ柄式・山形押型土器、石槌・石巻・スクリン
			平成27年度	縄文中期	-	-	-	
			平成28年度	縄文後期	土坑4基、溝穴遺構11基	指形式・市来式・中居式土器、石槌・石巻・磨製石片・打製石片・磨石	指形式・市来式・中居式土器、石槌・石巻・磨製石片・打製石片・磨石	
			平成29年度	縄文晩期	-	扇形式・黒川式	扇形式・黒川式	
			平成29年度発行 第七報告書(180)	弥生～中期	溝穴遺構3基、溝穴遺構5基	扇形式	扇形式	
	科学分析の結果より、縄文時代後期と考えられる常陸燻化器が11基検出されている。							

番号	遺跡名	所在地	発掘調査 年度	整理作業 報告書作成 年度	時代・時期		遺跡の概要				
					主な遺構	主な遺物					
10	下原 調査区 1	志布志市 志布志町 伊崎下 字下原	平成24年度 平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度 平成30年度(行 進)報告書(08)	平成25年度 平成26年度 平成27年度 平成28年度 平成29年度 平成30年度(行 進)報告書(08)	旧石器	縄張り3基	礫石片・礫石片・ヌクレイター・削片	主な遺物			
					縄文早期	竈穴建物跡3基、土壇9基、 集石17基、溝状遺構1基	磨石片、角石片、石版式、下割式、桑ノ丸式、押型文、瓦版式土 器、打製石鏃、打製石斧、磨石、礫石、石鏢				
					縄文早～中期	竈穴建物跡2棟	磨石片、角石片、中居B式土器、打製石鏃、打製石斧、磨石、礫石、 石鏢				
	調査区 2	志布志市 志布志町 宇留上	平成27年度	平成27年度	弥生～近世	溝状遺構13基、道跡1基、 溝状遺構4基、帯状硬化面1基	燗竈、掘削跡				
縄文中期	集石17基、土壇集中1か所				磨石片、角石片、倉間式、押型文、下割式、桑ノ丸式土器、打 製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、磨石、礫石、石鏢						
縄文早～後期	竈穴建物跡2軒、溝状土器遺構2基、 集石、土壇1基、溝状遺構7基、 硬化面1基				磨石片、角石片、倉間式、押型文、下割式、桑ノ丸式土器、打 製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、磨石、礫石、石鏢						
	調査区 3	志布志市 志布志町 宇留上	平成25年度 平成27年度	平成25年度 平成27年度	弥生早～中期	竈穴建物跡3軒	磨石片、角石片、山ノ口式土器				
縄文早期	集石3基、ピット9基				角石片、倉間式、石版式、下割式、桑ノ丸式土器、打製石鏃、 磨石、礫石						
縄文早～後期	溝状遺構2基、土壇2基、土壇集中 1か所、帯状硬化面1か所				野丸尾式、中居B式土器、石鏃、打製石斧、磨石、礫石						
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	弥生中～後期	竈穴建物跡2軒、高床式建物跡1軒、 ピット2基	中居中～後期土器				
縄文早期	集石3基、ピット9基				角石片、倉間式、石版式、下割式、桑ノ丸式土器、打製石鏃、 磨石、礫石						
縄文早～後期	溝状遺構2基、土壇2基、土壇集中 1か所、帯状硬化面2条				-						
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	縄文時代早期の多くの型式にわたる土器とともに集石が37基検出されている。縄文時代中期から弥生時代にかけての型穴建物跡や竈穴建物跡もみられ、 長期にわたる生活の場所として使用されていたと考えられる。						
					志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	旧石器	縄張り1基	削片(燧石)、礫石片・礫石片	
縄文早期	集石64基、溝状土壇3基、 土壇2基							竈石、磨石片、古田式、倉間式、石版式、手向山式、平箱式、 桑ノ丸式土器、打製石鏃、削片、石槍、二次加工削片、石核、磨製 石斧、磨石			
縄文早～後期	土壇11基	磨石片、丸尾式、北丸尾山式、中居B式、上加賀山式、丸尾式、 新川式土器、打製石鏃、石槍、削片、磨石、石槍、磨石、磨石、 磨石、二次加工削片、石核、石鏢、打製石斧、磨製石斧、磨石、 磨石、礫石、礫石、石鏢、石鏢									
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	弥生早～中期	土壇墓2基	割目雲文土器、夜臼式、楕円1、B式、丸来1、B式、古田 式、 山田山式、山ノ口式、野丸尾式土器、磨製石鏃、削片削片、磨石 片削片				
古墳	竈穴建物跡4軒、土壇1基				辻安原式、笠置式土器、勾玉、管玉						
古代	-				土師器、埴輪土器、輪の首口						
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	時期不明	土壇15基	-				
					志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	縄文時代早期においては、集石をはじめとする多くの遺構が検出している。縄文中期から弥生時代にかけては北九州系等の土器が出土しており、他 地域の文化の影響もある。古田時代以降の土器や、埴輪が4軒検出されており、編年の軸となる。			
								志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	旧石器
縄文早期	集石33基、土壇7基、落とし穴 1基	磨石片、加賀山式、小根3A式、丸ノ尾山式、岩間式、石版式、 下割式、桑ノ丸式、押型押型文、手向山式、桑ノ丸式土器、局 磨製石鏃、磨製石斧、削片、磨石、石核、削片									
弥生早～後期	落とし穴遺構6基、土壇4基	高橋式、丸来式土器、成川式土器									
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	中居	大型土壇2基、土壇2基、溝状遺構 4基、溝状面1条	土師器、土師質土器、有磁、白磁、発付、中居製陶器、タイ製陶器、 常滑性、丸戸器、備後性、東条系須恵器、軽石製土器、砥石、大型石 製品(土師器・砥石・石臼等)、鉄製品				
近世	石帯1基、溝状遺構2基、土壇4基				発付(肥前系)、燗竈(古田・龍門河系)、鉄製品、燗竈、石鏢						
					志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	縄文時代早期では、141基の集石や4基の溝状土壇などの遺構や多様な型式の土器が出土している。溝状土壇のブリッジ部から定形に近い石版式土器が 出土しており、注目される。弥生時代中期では、型穴建物跡7軒や竈穴建物跡5棟などの遺構も検出されている。特に溝状土壇内で集った土壇は他に 例がない。			
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)				縄文早期	縄張り1基	3段式土壇、削片	
縄文中期	集石141基、土壇8基、土壇設置 溝1基、溝状土壇4基							磨石片、石版式、押型文、手向山式、平箱式、桑ノ丸式、瓦版式土 器、打製石鏃、局磨製石鏃、削片、磨石、磨石、磨石、打製石斧、 石鏢、磨石、石鏢			
縄文早～後期	落とし穴遺構6基、土壇4基				磨石片土器						
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	弥生中期	竈穴建物跡7軒、竈穴建物跡5棟、 土壇7基、溝状土壇1基、 石帯1基	山ノ口式・中居式、瓦版式・田間式土器、土製勾玉・磨製石鏃・砥石・ 石臼、石臼・縄文和服石				
中居～近世	溝状遺構1基、古田7条、土壇墓2 基、石帯1基				土師器、陶磁器						
					志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)	縄文時代早期では、141基の集石や4基の溝状土壇などの遺構や多様な型式の土器が出土している。溝状土壇のブリッジ部から定形に近い石版式土器が 出土しており、注目される。弥生時代中期では、型穴建物跡7軒や竈穴建物跡5棟などの遺構も検出されている。特に溝状土壇内で集った土壇は他に 例がない。			
		志布志市 志布志町 宇留上	平成21年度 平成22年度	平成22年度 平成23年度(行 進)報告書(06)				縄文早期	落とし穴遺構2基	中居B式土器、石鏢、磨石、礫石	
縄文中期	竈穴建物跡4棟、集石1基							山ノ口式土器、磨製石鏃、磨石、礫石			
近世	帯状硬化面				二分金、鉄貨、掘削跡						
		志布志市 志布志町 宇留上	平成25年度 平成30年度	令和2年度 報告書(行予定)	弥生中期	竈穴建物跡4棟等の遺構や山ノ口式土器が出土している。近世においては、遺跡と思われる硬化面から、二分金が出 土している。					
					志布志市 志布志町 宇留上	平成25年度 平成30年度	令和2年度 報告書(行予定)	旧石器	-	行間式土器、礫石・磨石	
縄文早期	土壇10基、集石1基							石版式・下割式土器、石鏢・磨石・石鏢			
縄文中期	土壇1基、落とし穴3基	石鏢									
		志布志市 志布志町 宇留上	平成25年度 平成30年度	令和2年度 報告書(行予定)	縄文早期	-	磨石片、丸尾式、中居B式土器、石鏢、石鏢、打製石斧、磨石、礫石				
時期不明	土壇2基、溝状遺構2条				-						
					志布志市 志布志町 宇留上	平成25年度 平成30年度	令和2年度 報告書(行予定)	縄文時代中期では、落とし穴3基が検出されており、東九州部分の調査でも同様の遺構が出土しており、狩猟場としての利用が考えられる。			



第4図 都城志布志道路建設に伴う県内の遺跡

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

1 発掘調査の方法

宇都上遺跡の発掘調査は、平成23・28・29年度に試掘調査、平成30年度に本調査を実施した。なお工期の関係で確認調査は実施していない。本調査は、表面積4,998㎡、延面積7,483㎡を対象に実施した。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は、世界測地系座標におけるX=-165700.000、Y=8050をA-1区北西点（O・O）とし、区割りは10mおきにグリッドを設定し、北から南に向かって1・2・3・・・、西から東に向かってA・B・C・・・、と設定した。また調査の工程上、道路区画や地形で遺跡を大きく3分割し（第5図）、北から調査区1～3と分け、1から順に調査を行った。排土の移動や引き渡し等に考慮し、調査区1の調査時は2・3を排土場とするなど、排土の扱いに考慮しつつ進めた。

発掘調査において用地境界は安全上の措置として約1～2m程度内側に控えて調査範囲を設定し、調査深度が2mを超える場合は更に2m程度の段（控え）を設けて下層を掘削した。

表土及び無遺物層は重機で慎重に掘削し、その後、人力による掘り下げ作業を実施した。また、旧石器時代包含層の広がりを確認するため、11か所においてトレンチ調査（位置は第10図参照）を実施した。包含層中の遺物の多くは縄文時代早期の土器であり、トータルステーションで座標位置を測量後、取り上げた。遺構内遺物は図面上に記載し、遺構番号及び遺構内遺物番号を付けて取り上げた。遺構の検出時や埋土半掘・完掘時などには写真撮影を行った。また調査終盤の11月には、調査区内の縄文時代早期における集石遺構を中心に空中写真撮影を行った。

2 遺構の認定と検出方法

調査開始時において、調査区内は西側へゆるやかに傾斜する平坦な畑となっており、現代における耕地整理の影響を強く受けている。そのため、旧地形が高い場所では上部が削平されている遺構もみられた。それらの遺構は検出できた層から記録し、内部に入っていた遺物で時期判定を行った。

遺構の認定については、検出面の層位、埋土の色調、埋土半掘による確認を行い、調査担当者間で検討の上で認定した。主な遺構の認定は以下のとおりである。

縄文時代早期の集石遺構については、V層からVII層上面において、礫の集中箇所での規模等も考慮し認定した。また掘り込みについては、埋土の色調や礫の深さを考慮し決定した。土坑及び落とし穴については、VII層上

面を精査した後、土色の異なる箇所を半掘し、形状や深さを確認して認定を行った。溝状遺構については、検出面及び埋土、底面の形状を考慮し認定した。

なお、遺構は検出状況の写真撮影後、掘り下げ、実測等を行った。実測は、遺構の大きさに応じて縮尺10分の1もしくは20分の1で実施した。土坑や溝状遺構等は、埋土断面や完掘状況の写真も撮影した。

集石内には炭化物が含まれたものがあり、埋土ごと取り上げ、科学分析を行った。土坑内埋土は、土坑墓の可能性のあるものは報告書採取し、ふるいかけを行った。

3 整理作業・報告書作成作業の方法

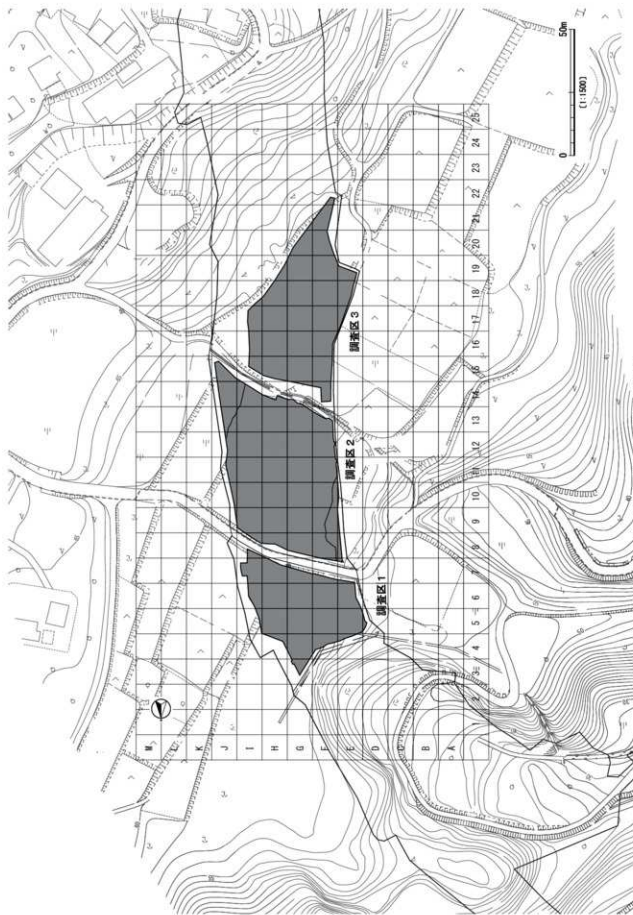
注記は、注記記号「UTU」を頭に、包含層資料は続けて「区」「層」「遺物番号もしくは一括」の順に記入した。遺構内資料は注記記号及び「区」の後に遺構記号を用いて遺構番号を記し、その後に「遺物番号もしくは一括」を記入した。遺物の差別は、層や遺構ごとに、時代や型式別で分類し、数や分布状況の把握に努めた。接合はすべて行い、時代や型式ごとに掲載遺物を決定し、実測・トレースを行った。集石遺構や土坑内で取り上げた埋土はフローテーションを実施し、採取できた炭化物はAMS年代測定を行い、年代推定の参考とした。

第2節 層序

層位は平成28年度の試掘調査で確認した層位を元に作成した（第6図）。本遺跡で確認された遺物包含層は、近世～中世（I～II層）と縄文時代早期（Va～VI層）である。また、時期決定の目安となる主な火山灰層の特色は以下のとおりである。

III b層では、黒色土中に黄褐色の御池火山灰層のバミスが認められた。基本的に御池火山灰のバミスは少量であるが、場所によっては数cmの堆積がみられた。IV a層の池田降下軽石は、黒色土中に軽石が点在する程度の量である。その直下には、IV b及びIV c層のアカホヤ火山灰があり、30 cm程度の層を形成する。層の下位には1 cm程度の豆粒状の軽石層が認められる。VII層は薩摩火山灰層で、15 cm程度の層厚であるが、谷部分では色調が薄くなり、明確に層が認められない部分もある。そこでは薩摩火山灰層上位の縄文時代早期該当の黒色土と下位の縄文時代草創期・旧石器時代該当の黒色土との境界が明瞭ではない。旧石器時代該当層には赤褐色のバミスが点在する部分がある。

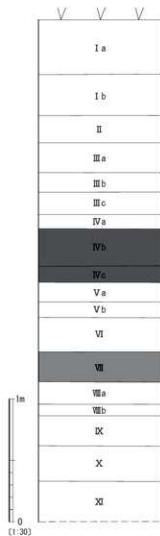
なお、H・I-9・10区を中心とした谷最深部のVII層以下は、流水等の影響を受けやすく、各層土が混在し分類できないため、T I～T III層の層位を別に設定した。T Iは黒色粘質土で、黄褐色バミスを多く含む層である。T IIは暗褐色粘質土で、黄褐色バミスはT Iに比べ少ない。T IIIは黒色粘質土で、極微細な石英を少量含む。



第5図 グリッド配置及び調査範囲図

基本層序

- I a層：黒褐色土 (10YR3/1) 表土
 I b層：黒褐色土 (10YR3/1) 旧表土
 II層：黒色土 (10YR2/2) 黄褐色パミスを含む。
 しまり弱く、粘性強い。層厚25cm程。
 IIIa層：黒色土 (10YR2/1) しまり有り、粘性有り。層厚25cm程。
 IIIb層：黒褐色火山灰 (10YR3/2) 御池火山灰を含む。
 しまり有り、粘性有り。層厚15cm程。
 IIIc層：黒色土 (10YR2/1) しまり有り、粘性強い。層厚20cm程。
 IVa層：黒褐色土 (10YR3/2) 池田降下軽石を含む。
 しまり弱く、粘性強い。層厚10cm程。
 IVb層：明黄褐色土 (10YR6/8) アカホヤ火山灰層。
 しまり強く、粘性有り。層厚30cm程。
 IVc層：黄褐色土 (10YR5/8) アカホヤ一次堆積層。
 豆粒状軽石含む。しまり弱く、粘性弱い。層厚15cm程。
 Va層：黒色土 (10YR2/1) 白色パミスを含む。しまり弱く、粘性有り。
 層厚15cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
 Vb層：黒褐色土 (10YR2/3) しまり有り、粘性有り。層厚15cm程。
 縄文時代早期の遺物包含層。
 VI層：黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色パミスを含む。
 しまり有り、粘性有り。層厚30cm程。縄文時代早期の遺物包含層。
 VII層：明黄褐色土 (10YR6/8) 薩摩火山灰層。P14を含む。
 しまり強く、粘性弱い。層厚25cm程。一部みられない部分あり。
 VIIa層：黒褐色粘質土 (7.5YR2/2) 所謂チョコ層。
 しまり弱く、粘性強い。層厚20cm程。
 VIIb層：黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱く、粘性有り。層厚10cm程。
 IX層：褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱く、粘性弱い。層厚25cm程。
 旧石器時代の遺物包含層。
 X層：暗褐色土 (7.5YR3/4) 二次シラス。
 しまり強く、粘性弱い。層厚30cm程。
 XI層：橙色土 (7.5YR6/6) 黄褐色軽石を含む。
 しまり弱く、粘性弱い。層厚30cm以上。

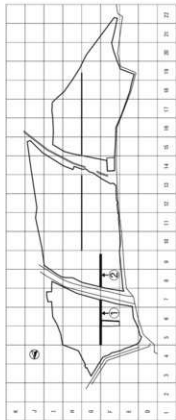
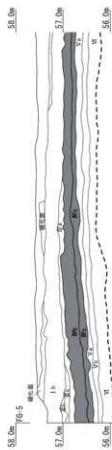


第6図 基本土層柱状図

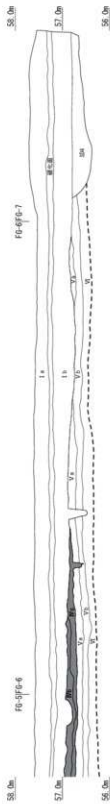


写真1 I-15区10T北壁土層断面

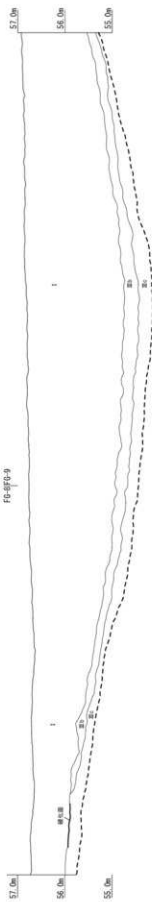
土層①



土層位置図



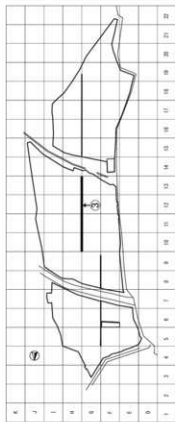
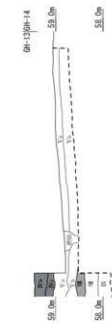
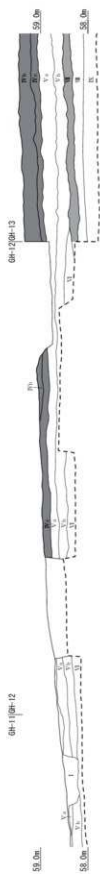
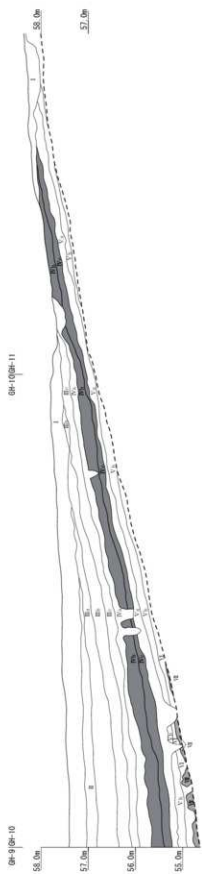
土層②



第7図 土層断面図(1)



土層③



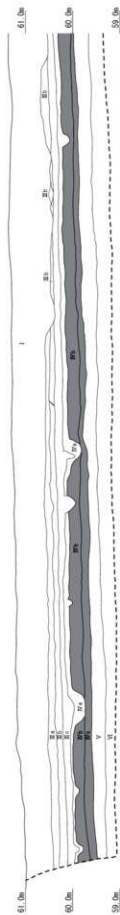
土層位置圖

第8圖 土層剖面圖(2)

土層④

GN-14GN-15

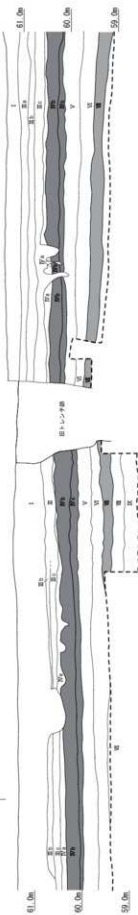
GN-15GN-16



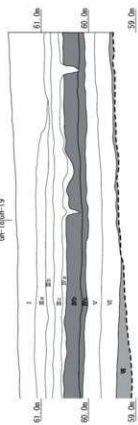
土層④

GN-16GN-17

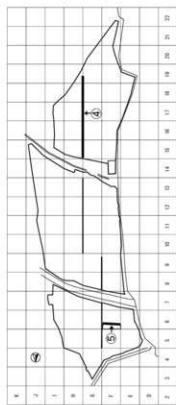
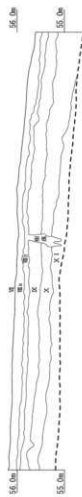
GN-17GN-18



GN-18GN-19



土層⑤



第9図 土層断面図(3)

第4章 調査の成果

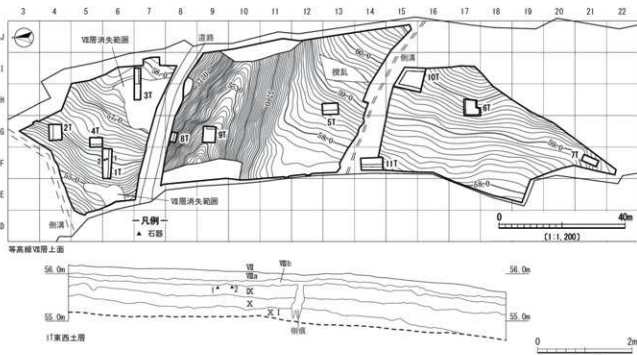
第1節 旧石器時代の調査

1 調査の概要

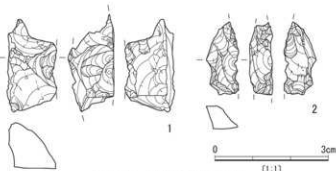
旧石器時代の調査は、各地区に及んで11箇所の試掘坑（1～11 T）をランダムに設け、Ⅶ～Ⅸ層を調査対象として人力掘削を行った。その結果、F～6区の緩斜面の1 Tから、わずか2点の黒曜石小片が検出されたにすぎず、それらはⅨ層中より出土し、約1 mの近距離で5 cmの高低差をもって認められた（第10図）。

2 出土石器（第11図1・2）

1・2は加工痕のある剥片で、定形石器の加工時の破片である可能性をもつ。右側縁に、素材剥片の腹面側からの幾らかのリタッチ痕を留めており、1は破砕して上下と左側面に折れ面、2も左側面の折れ面により形状を失っている。石材は、やや脆く大小の斑品を含み、三船産とみられる黒曜石である。



第10図 旧石器時代の試掘坑配置と石器分布図



第11図 旧石器時代の石器

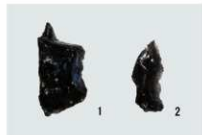


写真2 旧石器時代の石器

第3表 旧石器時代石器観察表

発出 番号	埋蔵 番号	出土区	層	取上番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
11	1	F6	IX	122	加工痕のある剥片	(2.42)	(1.30)	1.20	(3.3)	黒曜石	
	2	F6	IX	121	加工痕のある剥片	(1.90)	(0.86)	(0.60)	(0.8)	黒曜石	

第2節 縄文時代早期の調査

1 調査の概要

調査は、池田降下軽石を含む層からアカホヤ火山灰までのIV層を重機掘削で除去したのち、包含層であるV・VI層を動機・山鉾等を用い人力掘削で掘り下げた。

遺物は、集中して出土した地点はみられず、ほぼ散在した状態であった。大型の破片等はトータルステーションで出土地点の記録を行い、小破片はグリッド毎に一括して取り上げた。遺構は、個々に検出等の記録写真撮影を行い、主軸を設定し実測を行った。

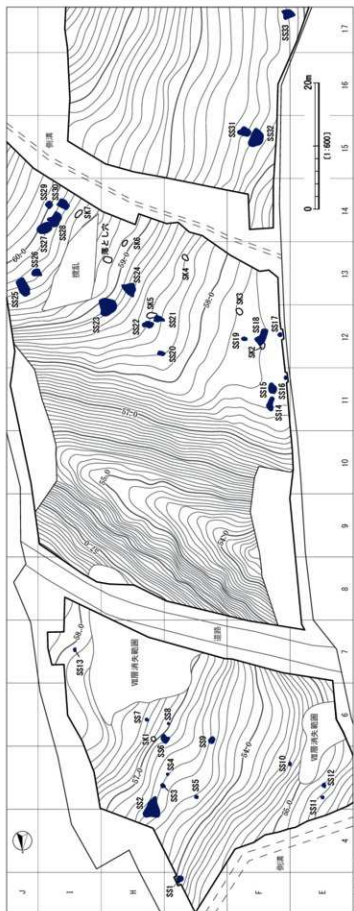
縄文時代早期の遺構として、集石遺構33基と土坑7基、落とし穴1基が検出された。遺構は安楽川へ下る谷部の谷頭部分の南北側に広がる。

礫は散在してみられ、比較的まとまった部分を集石遺構とした。分布は北側の3～7区と、8～10区付近の谷部を挟んだ11～17区に大別され、谷部に近い緩傾斜部にみられる。石材はほぼ砂岩で、遺跡西側の安楽川河畔でみられることから、ここから持ち込んだものと考えられる。

土坑は薩摩火山灰層（VII層）上面を精査し検出した。12～14区に帯状に広がり、集石遺構の南側に沿うように分布している。

H～13区で土坑として検出された1基は、他の土坑より明らかに深く、床面に逆茂木痕がみられたため、落とし穴とした。列状に並ぶことを想定し、周囲をくまなく調査したが検出されず、1基に留まったが、I～13区付近の攪乱部分に存在した可能性がある。

遺跡内ではE-5・6区やG-1-6～8区などのように、VII層まで破壊されている部分や先述した攪乱を受けている部分があり、遺構が隣接する区域であることから、そこにも集石等の遺構があった可能性が高い。なお、攪乱等を受けた部分は右図を参照されたい。



第12図 縄文時代早期の遺構配置図

2 遺構

(1) 集石遺構 (33基)

集石1号 (第13図)

G-3区のV b層上面で検出された。礫は約90×150 cmの範囲に広がっており、集中部は約90×60 cmの範囲に楕円状にまとまる。構成礫は43個で、1点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。焼けたものが若干認められ、破砕礫が多い。7割程度が200g以下の小型の礫であり、平均の重さは133gである。礫周辺の土は、炭化物を含む粘性が少ない黒褐色の土である。炭化物を4点、礫の下部で採取し、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で8720ca1BC-8540ca1BC (92.2%)の結果が得られた。土器は西側で1点出土した。

3は深鉢の胴部で、縦方向に貝殻刺突文がみられる。

集石2号 (第14図)

H-4・5区のV b層上面で検出された。南北軸より東側に円形の攪乱を受けており、その部分の礫数は不明である。礫は約260×350 cmの範囲に三角形に広がっており、特に礫が集中する部分はみられない。集石3・4号に近く、関連する可能性がある。構成礫は87個で、2点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。円礫が破砕したものが多く、平均の重さは32gで、また100g以下の礫は68個と、かなり小型の礫が多い。礫下に掘り込みはみられなかった。土器が2点、北東側で出土した。

4と5は深鉢の胴部であり、貝殻条痕文の上に縦方向に貝殻刺突文がみられ、形状や厚さから同一個体の可能

性がある。

集石3号 (第15図)

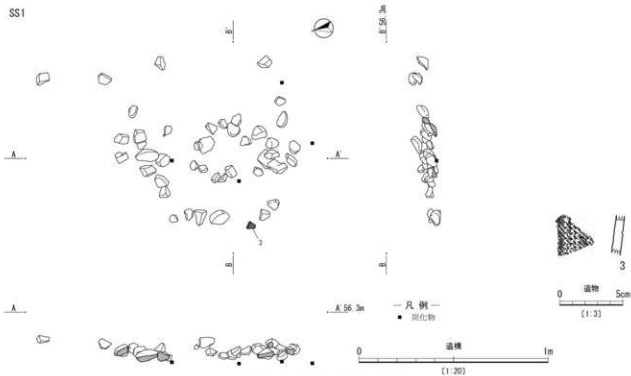
G・H-5区のV b層上面で検出された。礫は約60×70 cmの範囲に集中しており、構成礫は47個で、2点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。円礫とその破砕礫から構成されている。平均の重さは209gで、100g以上の礫は37個と、他と比較し大型の礫が多い。礫下にシミ状の黒色土がみられたが、明瞭な掘り込みは確認されなかった。礫の下部から炭化物5点を採取し、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で8622ca1BC-8422ca1BC (87.7%)の結果が得られた。土器は南側で1点出土し、周辺の2点と接合した。

6は加梁山式土器の深鉢の胴部である。貝殻条痕の上に斜方向の貝殻刺突文を等間隔に施し、上部の残存部分に楔形突帯の一部がみられ、内面は明瞭なケズリである。

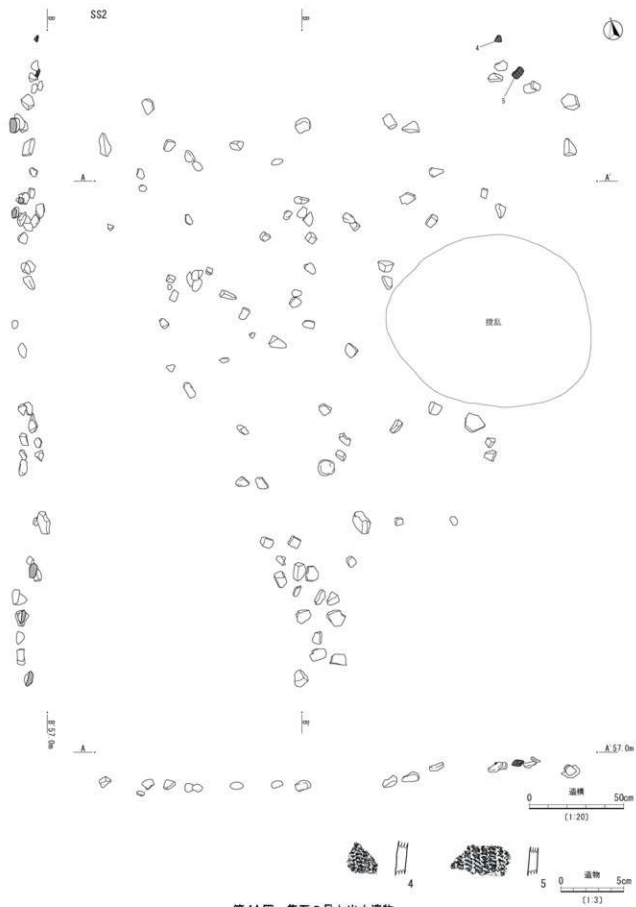
7・8は6と同一個体と思われる深鉢の胴部で、7は1列2段の楔形突帯が、8は底部付近に斜位の刻み目がみられる。

集石4号 (第15図)

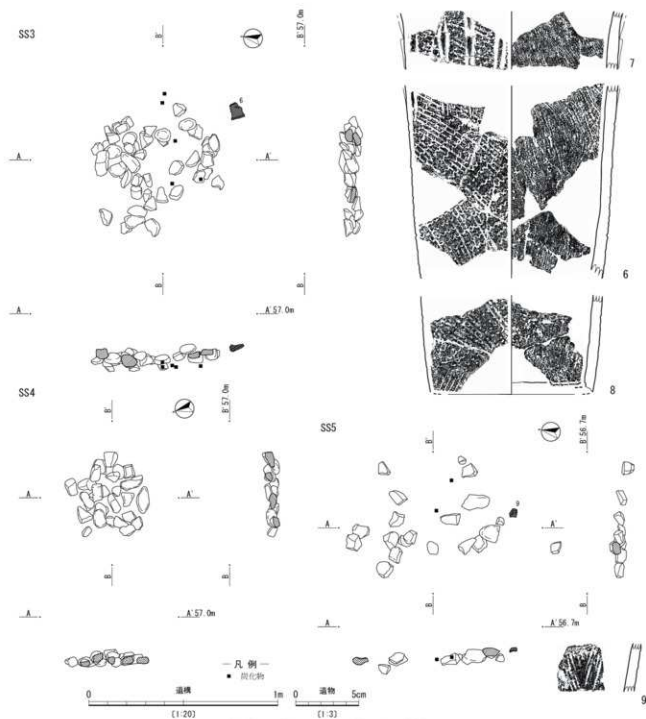
G-5区のV b層上面で検出された。礫は約50×50 cmの範囲にまとまる。構成礫は25個で、3点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。角が丸い亜角礫がほとんどで、焼けた礫や破砕したものは少ない。平均の重さは191gであり、やや大型の礫が多い。礫下に掘り込みはみられず、炭化物も出土していない。



第13図 集石1号と出土遺物



第14图 集石2号と出土遺物



第15図 集石3号～5号と出土遺物

集石5号 (第15図)

G-5区のVb層上面で検出された。礫は約90×70cmの範囲にややまとまっている。構成礫は20個で、すべて砂岩である。平均の重さは310gであり、大型の磨石状の礫が破砕したものがほとんどである。礫下には掘り込みではないが、炭化物を含んだ染みこみの範囲が認められる。炭化物を2点、礫間から採取し、AMS年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で8924calBC-8737calBC (55.3%) 及び9125calBC-8998calBC (40.1%)

の結果が得られた。土器は南側に1点出土した。

9は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕文がみられる。

集石6号 (第16図)

G・H-6区のVI層上面で検出された。礫は約130×120cmの範囲に広がっており、集中部は約70×70cmの範囲にまとまっている。構成礫は61個で、1点のみ凝灰岩で、他は砂岩である。平均の重さは229gであり、拳大の礫が多く、直径10cmを超える礫も確認される。全体的に赤色化した破砕礫が多く、被熱の影響が考えら

れる。礫下に掘り込みはみられず、炭化物も検出されなかった。土器は集中部の外側に2点出土した。

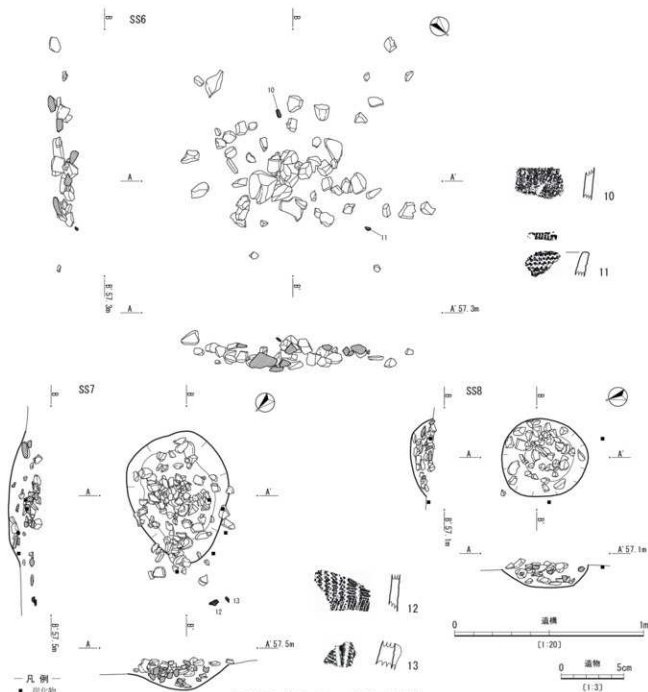
10は深鉢の胴部で、摩耗している縦位の貝殻刺突文が薄く残っている。11は深鉢の口縁部で、横位の貝殻刺突文が3条みられ、口唇部は刻み目が入る。

集石7号(第16図)

H-6区のVI層上面で検出された。礫は約90×50cmの範囲に集中している。構成礫は132個で、すべて砂岩である。平均の重さは241gであり、大小様々な大きさがみられる。全体的に被熱を受けたと考えられ、割れ口

がはっきりしたものが多い。礫集中部分の下に70×60cm程度の掘り込みがみられ、埋土は白色粒・褐色粒を多く含む黒色土であり、微細な炭化物が含まれていた。炭化物を5点採取し、AMS年代測定を行ったところ、周辺土器との年代に乖離がみられたため、2回目の測定を行っている。詳しくは第5章を参照されたい。土器は集中部の東側に2点出土した。

12・13は深鉢の胴部である。12は下部に縦位の刻み目がみられることから、底部付近と考えられる。13はシャープさを欠いた楔形突帯の一部が残る。



第16図 集石6号～8号と出土遺物

集石 8号 (第 16 図)

G-6 区の VI 層上面で検出された。礫は約 60 × 70 cm の範囲に集中している。構成礫は 46 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 58g であり、100g 以下の小礫が多く、大型の礫が多い近隣の集石 6号と対照的である。赤色化した礫も含まれており、破砕礫が多いことから、被熱の影響が考えられる。礫集中部分の下に 50 × 40 cm 程度の掘り込みがみられ、埋土は黄色粒・白色粒を多く含む黒色土であった。炭化物を 2 点、礫周辺から採取し、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8833ca1BC-8621ca1BC (95.4%) の結果が得られた。近隣に土器は出土していない。

集石 9号 (第 17 図)

G-6 区の VI 層上面で検出された。礫は約 110 × 100 cm の範囲に広がっており、約 70 × 60 cm の範囲に方形状にまとまる部分がみられる。構成礫は 39 個で、8 点が砂岩で、他はすべて凝灰岩であり、他の集石と比較して石材の違いが大きい。平均の重さは 95g であり、150g 以下の小礫がほとんどである。赤色化した礫や、掘り込みや炭化物は確認されなかった。土器は集中部の南側に 1 点出土した。

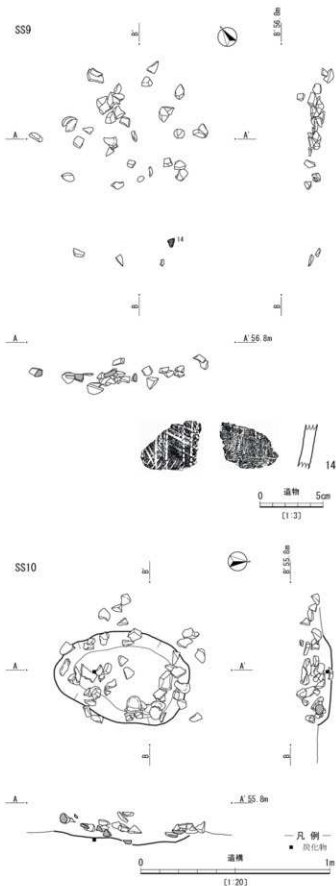
14 は深鉢の胴部で、斜め方向の貝殻条痕の上に縦位の貝殻刺突文が施されている。下側に斜めの刻みがあることから、底部付近と考えられる。

集石 10号 (第 17 図)

E・F-5 区の VI 層上面で検出された。礫は約 70 × 70 cm の範囲に方形状にまとまっている。構成礫は 49 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 116g であり、200g 以下の破砕礫がほとんどである。礫集中部分の下に約 70 × 50 cm の楕円状の掘り込みがみられ、埋土は微細な白色粒・褐色粒を含む黒褐色土である。炭化物を 1 点、掘り込みの床面付近から採取し、AMS 年代測定を行ったところ、2σ 暦年代範囲で 8308ca1BC-8246ca1BC (25.1%) の結果が得られた。土器は出土していない。

集石 11号 (第 18 図)

E-5 区の VI 層上面で検出された。2 段にわたる掘り込みがあり、ほぼその範囲から礫が出土し、特に 2 段目に集中する。1 段目を含めた掘り込みの範囲は約 60 × 60 cm、2 段目は約 45 × 40 cm を測り、形状は円形に近い。埋土は微細な白色粒・黄色粒を含む黒色土で、Vb 層土が主体と考えられる。構成礫は 46 個で、すべて砂岩である。平均の重さは 119g であり、200g 以下の赤色化した破砕礫がほとんどである。炭化物や遺物は出土していない。



第 17 図 集石 9号・10号と出土遺物

集石 12号 (第18図)

E-5区のVI層上面で検出された。礫は約60×70cmの範囲に菱形にまとまっている。構成礫は54個で、すべて砂岩の破砕礫であり、7割程度が赤色化している。平均の重さは86gであり、ほぼ200g以下の小礫で構成される。掘り込みや炭化物はみられない。土器は集中部の北側に1点出土した。

15は深鉢の胴部で、横方向の貝殻条痕が施されている。

集石 13号 (第18図)

I-7区のVb層上面で検出された。礫は約70×40cmの範囲にあり、南側にやや集中する部分がある。構成礫は18個で、2点が凝灰岩で、他はすべて砂岩である。ほぼ破砕しており、平均で57gと、小さめの礫が主体である。赤色化しているものも少量みられる。炭化物や遺物は出土していない。

集石 14号 (第19図)

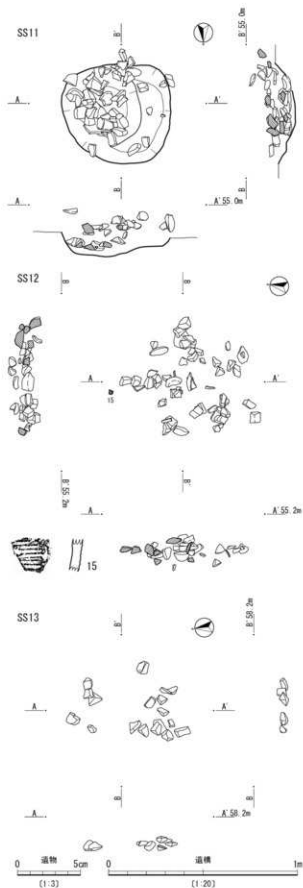
F-11区のVI層上面で検出された。礫は約220×120cmの範囲に南北方向に広がっており、集中部は約60×50cmの範囲にまとまり、下に円形の掘り込みがみられる。掘り込みの埋土は、微細な白色粒・黄色粒を含む黒色土で、Vb層土が主体である。構成礫は91個で、すべて砂岩である。歪角礫や円礫が破砕したものがほとんどであり、平均で95gと、小さめの礫が主体である。赤色化しているものはみられず、炭化物は出土していない。土器は広がった状態で6点出土した。

16は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕が施される。17は円筒形の深鉢で、口縁部に縦筋の入った山形の工具で押し、胴部外面全体及び胴部内面上部に貝殻条痕を施している。外面の条痕は上は横方向で、下側は斜め方向となる。17については、この集石上部だけでなく、隣接する集石15号の礫集中部及びこれら2つの集石周辺に広がっていた。土器が接合していることから、集石14・15号はほぼ同時期と考えられる。

集石 15号 (第20図)

F-11区のVI層上面で検出された。礫は約110×100cmの範囲に南北方向に広がっており、集中部は約50×50cm程度の範囲にまとまるが、掘り込みはみられない。構成礫は41個で、1点が頁岩で、他はすべて砂岩である。歪角礫や円礫が破砕したものがほとんどで、平均で192gと他の集石より大きめの礫が多い。赤色化しているものはみられず、炭化物は出土しなかった。土器は中心から周辺まで広がった状態で11点出土しており、17の一部を含む。

18・19は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕が施される。



第18図 集石11号～13号と出土遺物



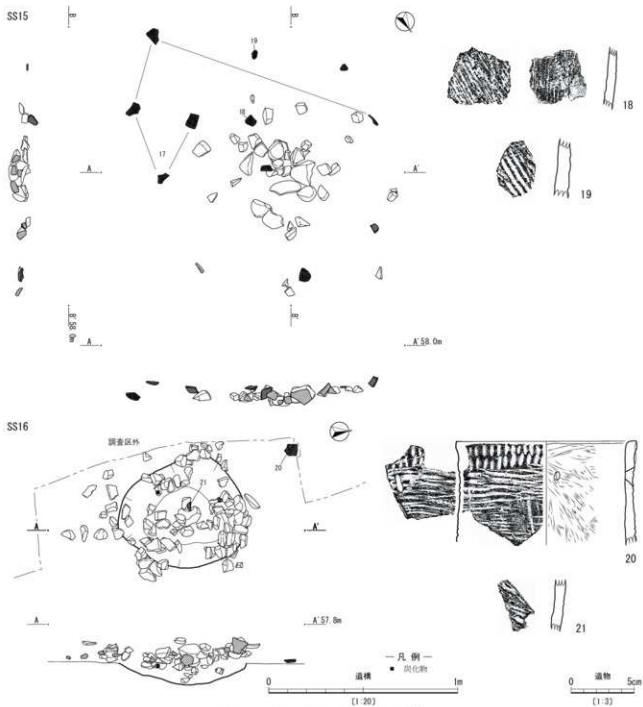
第19图 集石14号と出土遺物

集石 16号 (第20図)

F-11区のVI層上面で検出された。調査区西側の壁際にあたり、用地外に広がる可能性が高い。礫は約100×70cmの範囲にまとまっており、集中部の下に約70×60cm程度の円形の掘り込みがみられ、埋土は微細な白色粒・褐色粒を含む黒褐色土である。構成礫は88個で、すべて砂岩の破砕礫である。平均で146gと大小様々な礫で構成されており、一部は被熱し、赤色化した礫も含んでいる。炭化物は礫の下部より1点出土して

おり、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で8719calBC-8554calBC(95.4%)の結果が得られた。土器は北側に1点、中心部分の上部に1点出土している。

20は前平式土器の深鉢の口縁～胴部で、口縁部外面に2列の楕円形の押圧、その下に横方向の貝殻条痕がみられる。また1か所に外面12mm、内面6mm程度の穿孔が施されており、外側から垂直方向に削ったと考えられる。21は深鉢の胴部で、斜方向の貝殻条痕がみられる。



第20図 集石 15号・16号と出土遺物

集石 17号 (第21図)

F-12区のVI層上面で検出された。集石16号と同様、調査区西側の壁際にあり、用地外に広がる可能性が高い。礫は約50×50cmの範囲に集中しており、その下に約70×70cm程度の楕円形の掘り込みがみられ、埋土は1mm程度の白色粒・黄褐色粒や微細な炭化物を多く含む黒色土である。構成礫は66個で、6点が砂岩、他が凝灰岩と他の集石と比較すると石材構成の違いが大きい。平均で66gと小型で破砕した礫が主体であり、一部は被熱している。炭化物は7点散在して出土しており、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で8809calBC-8638calBC(95.4%)の結果が得られた。土器は礫の上部付近で4点出土している。

22～24は深鉢である。22は胴部で、斜方向の貝殻条痕がみられる。23・24は底部で、底面に編布痕が施される。

集石 18号 (第22図)

F-12区のVb層上面で検出された。礫は約290×190cmの範囲に散在しており、礫が集中する部分はみられないため、集石17号などの礫を広げた部分にあたる可能性がある。構成礫は36個で、2点が凝灰岩、1点が軽石で、他は砂岩である。円礫が破砕したものが多くみられる。平均の重さは320gで、300g以上の礫が12個と多い。礫下に掘り込みはみられず、炭化物も確認されなかった。土器は散在した状態で7点出土している。

25～27は前平式土器の深鉢胴部であり、外面に貝殻条痕が施される。28は下刺峯式土器の深鉢で口縁部が

内湾し、外面には横方向の貝殻刺突文がみられる。

集石 19号 (第23図)

F-12区のVII層上面で検出された。礫は約90×70cmの範囲にまとまっており、ほとんどが破砕礫である。その下に約120×80cm程度の楕円状の掘り込みがみられ、埋土は黄色粒や白色粒を多量に含む黒色土であり、V層土が主体と考えられる。構成礫は91個で、凝灰岩が18点で、他はすべて砂岩である。平均の重さは92gであり、100g以下の破砕礫がほとんどである。炭化物は固化していないが中心付近で1点出土しており、AMS年代測定を行ったところ、2σ暦年代範囲で8772calBC-8624calBC(95.4%)の結果が得られた。土器は出土していない。

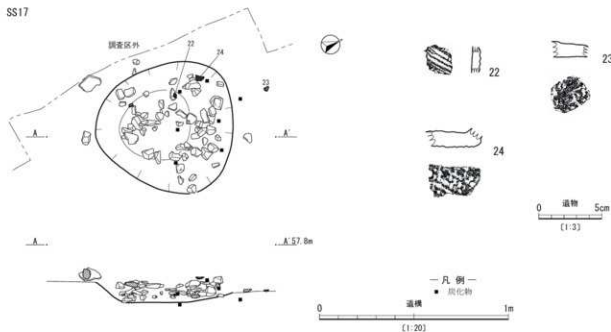
集石 20号 (第23図)

H-12区のVb層上面で検出された。礫は約140×150cmの範囲に広がり、集中部では約50×30cm程度のまとまりがある。ほとんどが角礫が破砕したものであり、構成礫は46個で、すべて砂岩である。赤色化したものは一部みられる。平均の重さは78gであり、100g以下の破砕礫が多い。炭化物や遺物は出土していない。

集石 21号 (第23図)

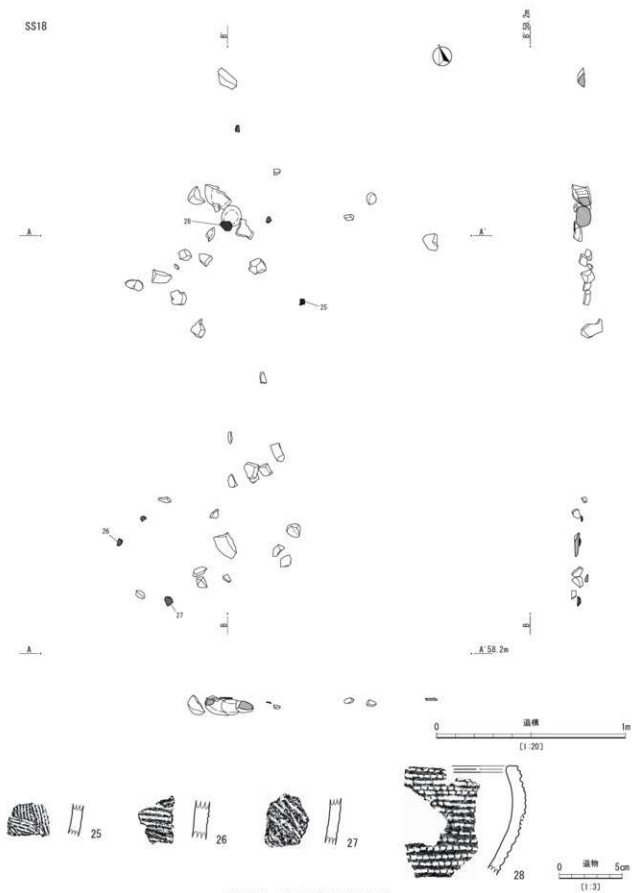
H-12区のVb層上面で検出された。礫は約170×100cmの範囲に広がり、集中部はみられない。構成礫は36個で、すべて砂岩である。平均の重さは111gであり、小型の角礫が破砕したものが多く、炭化物や遺物は出土していない。

SS17



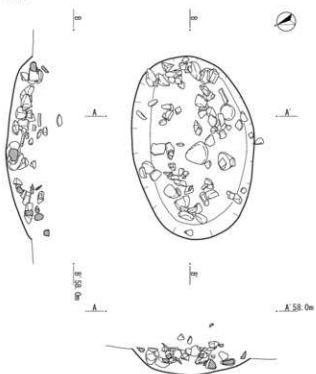
第21図 集石17号と出土遺物

SS18

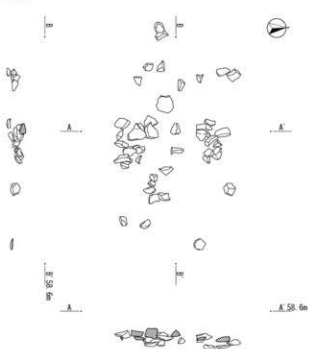


第 22 図 集石 18 号と出土遺物

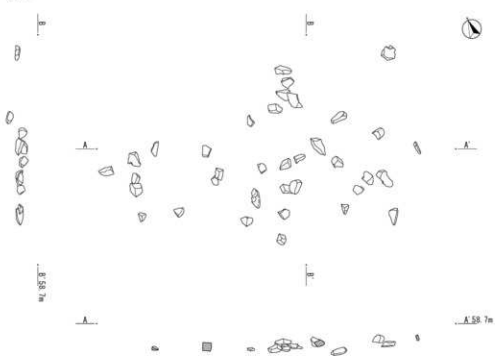
SS19



SS20



SS21



第23図 集石19号~21号